

国家権力犯罪を糾す

宮澤・レーン・スパイ冤罪事件

総資料総目録

冤罪再発阻止！
次なる展開へ

補遺

2020年

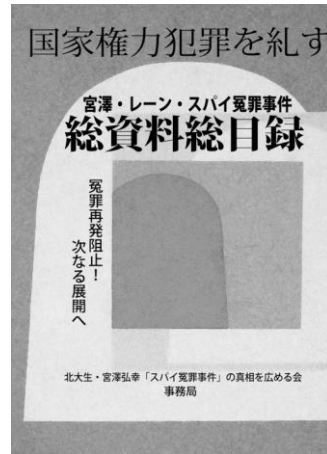
第一部＝関連事項の訂正・補足

第二部＝史料検証

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会
事務局

《参考》

表紙デザイン・杉全 泰



2018年1月29日 発行

総目次

はじめに

国家権力犯罪を糾し、新たな運動を巻き起こす一助に	1
秋間浩・上田誠吉往復書簡	9
山野井孝有の訴え	11
冤罪の被害者	12

冤罪の概要 14

スパイ冤罪と戦後の秘密法策動・関連
年表 16

第一部 論考

正確に伝えたい 17

―誤用・誤解・半解事項の解消を
検証・12月8日の冤罪 31

―宮澤弘幸はどこで検挙されたのか

再審への課題 43

―宮澤弘幸の大審院判決から
最初の問題提起 51

―初心忘れることなく

第二部 資料

冊子『引き裂かれた青春』 55

(山野井孝有)

講演録「戦時下の言論・思想弾圧」 79

(荻野富士夫)

総括と決定 85

冊子『北大に求めた処置と責任』 99

建碑に寄せられた意見 111

活動経過 131

第三部 目録

全資料目録 145

新聞・NHK・団体機関紙誌等の報道
目録 164

本会刊行目録 170

事務局たより・番外編 172

事務局たより・番外編 172

編集後記 176

《巻末から横組み》

花伝社刊『引き裂かれた青春』索引(横
組み、巻末①)

会報・事務局たより(横組み、巻末②)

「総資料総目録」は、本会ホームページに全文掲載

<http://miyazawa-lane.com/>

目次

はじめに

第一部 関連事項の訂正・補足

訂正・補足対象文献は以下の通り

『引き裂かれた青春―戦争と国家秘密』花伝社

2014年9月5日刊

『宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録』

2018年1月29日刊

『国家権力犯罪に“時効”はない』

2019年10月1日刊

『総資料総目録』 訂正・補足

1、正確に伝えたい 3

◇12・8一斉検挙

宮澤弘幸の早期訪問はありえない

一斉ながら同時ではなかった

宮澤弘幸の検挙も午後か

レーン夫妻はお客さん？

犯意の立証がない裁判

◇逮捕と検挙

召喚状は携行し読み上げた

◇教師失職

始業直前に自宅待機を命じられた

家族の面倒は警察官がとりもった

◇北大への望郷

ポーリンは同志社の教師だった

システアは流感死だった

2、本件・冤罪解明への発端 8

3、全資料目録 訂正・追加 9

4、新聞・NHK・団体機関紙誌等の報道目録 追加 10

『引き裂かれた青春』花伝社版 訂正・補足 11

『国家権力犯罪に“時効”はない』訂正・補足 12

◇活動経過 13

◇「補遺」発行にあたって 16

第二部 史料検証（裏表紙から横組み）

I ポーリン手記 (Prison Life in Japan)

II ベリー記事（レーン姉妹の証言）

はじめに

『総資料総目録』を刊行して二年余、冤罪の被害者ポーリン・ローランド・システア・レーンの「手記」が見つかり、半ば埋もれていた英文記事の中に、「手記」に記された事実を裏づける記述のあることがわかった。

被害者自身による記録は、同じポーリンの上告趣意書に次ぐ発見であり、事件に寡黙とされてきたレーン夫妻の肉声として刮目される。

中身も濃く、検挙状況から留置場・拘留所での対応など、冤罪解明の空白部分を埋めると同時に、これまで事実とかわれてきた「事実」に書き換えを迫る第一級の史料と言ってい。英文記事と合わせ、本件検証の新たな弾みとなる。

手記は、ポーリンの母校である Middlebury College の News Letter 1947-01-01 に掲載された『Prison Life in Japan』と同校のホームページに収録されている。

表題のとおり、留置場・拘留所での状況に手記の大半が割かれているが、冒頭で、日米開戦の日1941年12月8日のレーン家に何が起こったかを克明に記しているのははじめ、随所に史実にかかわる出来事が織り込まれている。

英文記事は、滞日経験もある記者 Katherine F. Berry が、日米交換船（第一次）でアメリカに送還されたレーン夫妻の双子の末娘から聞き取った一部始終を特集したもの。当時11歳だった姉妹を襲った苦難に寄り添い、踏み込んだ展開だが、その発端となる12月8日のレーン家に何が起き、姉妹の家族に何をもたらしたのかが姉妹の目を通し記録されている。

手記の執筆は、News Letter の日付から推して1946年の暮れ以前、検挙からは5年余で、戦後1年余の時点となる。記事の方は、当該部分だけが切抜かれた複写で、発行紙、発行日とも把握できていないが、記事の文脈から推して1943年11月末から12月、レーン夫妻が日米交換船（第二次）でアメリカに着く直前だったと思われる。

まだ戦争のさ中、レーン夫妻の検挙にかかる記事としては日米通じて、これがおそらく最初だったと思われる。

手記をみつけたのは、岩手県盛岡市在住の吉田栄一さん。日米交換船の船上でレーン姉妹と行き合うアメリカ人宣教師ギルバート・シュレーヤの動静を追っていて、『総資料総目録』の編纂でも数々の協力を得た、本会・会員でもある。

その後も、本件・英文記事を書いたBerry記者について調べるなかで、ポーリンのアメリカでの経歴にいきつき、「手記」の発見につながった。

吉田さんは、2018年7月に札幌で開かれた宮澤・レーン事件を考える会主催の集會に招かれ、『レーン姉妹と岩手の宣教師一家』の題で講演しており、この折に、同会幹事と情報交換する中での探索で見つけた」といい、その経緯は「ポーリンさんの青年期／送還されても心は札幌に」と題し、同会発行の冊子『レーン夫妻を語り継ぐ その3』に掲載されている。

ポーリン手記、Berryの英文記事の他にも、検証は地道に重ねられており、花伝社版『引き裂かれた青春』を含め、訂正、書き直しの必要な事項が蓄積されている。

本会、および『総資料総目録』が掲げる基本は「正確に伝えたい」であり、今回、手記および英文記事の検証を機に、『総資料総目録』を、より正確で完全なものへと期し、「補遺」の形で

本冊子を刊行することにした。

国家権力犯罪に『時効』はない——を旨に、より広く、深く、鋭く検証願えればありがたい。手記と英文記事の検証は英文が主体となるので、巻末からの横組みで背中合わせに収録した。なお、以下文中では、総資料総目録Ⅱ総総、花伝社版Ⅱ花伝、ポーリン手記Ⅱ手記、英文記事ⅡB記事、と略記する。

(以下事務局 文責は本会会員・大住広人)

第一部 関連事項の訂正・補足

『総資料総目録』 訂正・補足

1、正確に伝えたい (総総Ⅱ17ページから)

◇12・8 一斉検挙 (総総Ⅱ18ページ)

宮澤弘幸の早朝訪問はありえない

手記、及びB記事によって12・8の情景を再現すると、午前7半前後には、ポーリン、ハロルド、キャサリン、ドロシーの家族四人が前後して自宅を出、それぞれ登校した。

ポーリンは午前8時から会話の授業があり、事務室に寄ったところ、総長(学長Ⅱ今裕)からの呼び出しが待っていた。総長室へ出向くと、アメリカと戦争になったと告げられ、自宅待機するよう命じられた。そこで自宅に戻ったところ、既にハロルドも戻っていて、同じく命じられたと知った。

その後、ハロルドは銀行へ行くといって出かけ、ポーリンは

昼どきになったので、ヘンリー(ハロルドの父)と昼食を摂っている、玄関のベルが鳴った。

戸を開けると、11人の男たちがいて、警察官と分った。その中の一人は顔見知りの特高(外事担当)だった。勾留を告げられ、家宅捜索が始まり、ポーリンは札幌警察署に連行され、地下の留置場に入れられた。

しばらくして、ハロルドの声が近くに聞え、別の房に入れられる気配を感じた。銀行から帰ってきたところで勾留されたものと知る。

一方、キャサリンとドロシーの姉妹は、教室に入るなり、先生から戦争になったと教えられ、教室が騒然となっていた。

そのうち、家に帰るよう言われ、二人は先生に付き添われて学校を出た。おそらく、先生にはなぜ帰宅させたかを家人に伝える要もあったと思われる。

だが帰宅すると、既に両親は居なかった。家宅捜索は続いていて、祖父のヘンリーとお手伝いの石上茂子は部屋の間追いやられていた。身がすくんだが、学校へ戻ることもできず、泣くことさえ許されず、幼き姉妹も居場所を失った。

以上が、手記とB記事に基づく情景になる。姉妹の場合は最長で二年弱ほど後年の記憶、ポーリンの場合は、検挙後五年前後、拘束解放後三年余、戦後一年余、という記憶になる。B手記と記事の内容は重なっていて、大きなずれは見られない。

ここで、解明での宿題、宮澤弘幸とレーン夫妻との接点から見ると、宮澤弘幸は手記にも記事にも全く現れていない。

これをどう読み解くか。

改めて、「上田仮説」(総総32ページ)による情景では、宮澤弘幸は午前7時のラジオ・ニュースで日米開戦を知り、手持ちの最

短時間でレーン宅に向かっている。

したがってレーン宅着は午前8時前後となる。だが、多少前後したとしても、この時間帯は、ポーリン、ハロルドとも総長室か、その周辺に居て、自宅には居ない。

また「上田仮説」では、宮澤弘幸には尾行がつき、レーン宅周辺にも張り込みが居たと記している。

だが、「手記」では、11人の警察官が玄関のベルを押したのは昼どきとなっている。この間、家族は何度か家を出入りしているが、家の周辺に何の異様も感じていない。

開戦を知って、真っ先に駆けつけ、師への信頼に变りのないことを告げたとすれば、これは並みの出来事ではない。レーン宅にラジオがあったかどうか不明だが、夫妻とも総長に告げられるまで開戦を知らなかったのは読み取れる。

もし、起き抜けに宮澤弘幸から開戦を聞いていれば、この日の流れは違ってくる。朝一番の感動が強い記憶となつて「手記」に現われて当然と言える。だが手記とB記事には影もない。この朝、宮澤弘幸が訪ねた可能性は限りなく低くなる。

感動でいえば、「手記」は、人との出会いを筋立ての柱に据えている。警察官、看守、拘置所長ら、逆境で出会った人たちから受けた温情や便宜への感謝の気持ちが続られている。朝一番があれば、これらに勝るとも引けをとらない。

やはり「上田仮説」は、記憶が伝承される中で何らかの思い違いや思い込みがあつて美化伝説に流れたと思われる。

一斉ながら同時ではなかった

手記で、もう一つ明らかなのは、一斉検挙が一斉同時という意味からいえば、「同時」ではなかった。最初にポーリン、次い

でハロルド、さらに遅れて石上茂子が拘束されている。

これまでの検証では早朝同時を前提にしていた。内務省発表の「午前七時以降……全国的に一斉検挙を実施せり」の呪文がそれだけ強く、これも思い込みといえる。今回の手記とB記事は、この思い込みをも砕くことになった。

全国一斉は、発令に於いては一斉ながら、現場での着手は各管区の実情によつたことになる。札幌では指令を受けてから集合をかけ、段取りを始め、出動は昼に近くなつた。事前逃亡はないと踏んで、時間的には緩慢になつたとも考えられる。

中で、住み込みの石上茂子の拘束が、夫妻よりも後になつた事情は解せない。石上は、終始、屋内に居たのだから、検挙リストにあれば、ポーリンと同時に拘束されて当然となる。現場に何らかの混乱があつたのか、それともB記事に何かの思い違いがあつたのか、ここはなお、宿題となる。

総総の論考（検証・12月8日の冤罪Ⅱ31頁）は、「上田仮説」の矛盾を検証し、宮澤弘幸によるレーン宅訪問のありえない状況を論証したもののだが、「手記」「記事」によつて論証自体が不要になつた。同時に、早朝同時検挙の論旨も根拠を失い、不要となつた。事実の持つ重みを改めて痛感させる。

宮澤弘幸の検挙も午後か

早朝訪問の可能性がなくなれば、宮澤弘幸検挙の臨場も白紙に戻る。先々一番の宿題となるが、気になる消息はある。一つは、北大工學部の書記（会計係）だつた村田豊雄が定年後に刊行した随想録『白聖館の人たち』（1969年刊）の中に

「その日の午後、M君は蒼白な顔をして学部に見われ、又去つて行つたが、その下宿でたい捕されたという事を聞いた」

——とのくだりがある。Mは宮澤弘幸にはかならない。

この一件は花伝でも引用しているが、当時は「早朝一斉」に比重があつたので、「午後」には？を付けて懸念、保険をかける意味合いでの引用に止めおいた。だが、手記によって「早朝」が消えれば、反転して目撃された「午後」が生きてくる。

あわせて、宮澤弘幸の家主の言として、

「今朝、警察が宮澤さんの部屋に踏み込んで、めっちゃめっちゃにしていった。宮澤さんは北大で捕まったらしい」

——がある。こちらは逆に、「今朝」の表現が気になるが、家宅搜索のとき、宮澤が居なかったことは注目される。

この言も、花伝に引用しているが、二つの消息が直ちにつながらないまでも、真相解明に向けて意味ある断片となる可能性はある。宮澤弘幸は、この日、どこをどう動き、どこでどう拘束されたのか。今回、手記およびB記事の発掘は、何が、どこに、どう埋まっているか知れないぞ、と教えてくれる。

レーン夫妻はお客さん？

手記を一読、実は一番驚いたのは、検挙の警官から留置場での看守、さらには警察署長、拘置所長らに対し、全く敵視、非難の気配がないことだ。それどころか、感謝、親愛の情を込めて回想している。最初は裏返しの皮肉？とも思ったが、真摯な文脈は最後までぶれていない。

前の項では「人との出会いを筋立ての柱に据えている」と少し上品に表現したが、「手記」はあっけらかんと具体的だ。

たとえば、現場主任とおぼしき外事担当の特高刑事を「ミクス」と半ば特定したうえで「friend」とまで呼んでいる。24時間見回りの看守へも感謝。拘置所の所長へは、アメリカへ送還される

途上の交換船から感謝の礼状まで送っている。

裏返せば、札幌の警察現場は、人道、人権に篤かったことになる。これはいつたい、いかなることか。

「ミクス」は自宅に取り残された病弱の祖父と11歳の姉妹の面倒をみて、修道会の庇護を受けられるよう取り持ち、警察署長は自ら先導して丁重に留置場へ案内し、看守らは差し入れ等の便宜をはかり、夫妻が日に一度は顔を会わせられるように配慮もし、拘置所長は一度ならず応接室に招いては、午後のお茶をふるまい、くつろぎの時間と空間を提供している。

一言にすれば、鬼畜米英史観からはあり得ない情景だ。たしかにレーン夫妻、とりわけポーリンには人間関係を豊かにする天性があり、どんな境遇にあつても自己を失わない楽天といつてもいい健気さがある。

それは、「心の会」の仲間たち、戦前戦後を通じ、いまでも回想し語り合う教え子たち、さらには、当時の街の人たちに知られていて、それが警察現場にも現れたに過ぎないのか。

それにしても、描かれた情景は、いささか度が過ぎる。いかにも人柄に惚れたとしても、スパイ嫌疑で拘束した敵国人だ。しかも戦時下、各界各層で相互監視の空気は強まっている。利敵行為として密告されれば、即、非国民となつて明日を失う。

ずばり、ここは思い込みで言つて、夫妻はお客さんだったのではないか。軍機保護法違反、スパイ嫌疑は文字通りの口実であつて、身柄保全が目的であり、いずれ本国送還を視野にいれての、「客人」としての扱いだった。

そう捉えると、ポーリンが上告趣意書で「(拘束は)米國ニ送ラレル迄或ハ戦争ノアル間保護サレル(ためかと思つた)」と記した感覚が符合してくる。ポーリンに、そのように思わせる拘

束時の処遇だったということだ。

本国送還は、戦時における相互、互惠、双方向の利害に基づいている。敵国で拘束されている自国要人を相互に取り返すまでの大切な人質であり、相応の扱いがあつて不思議ない。当時はまだ、官憲現場でもそれくらいの国際感覚は十分に持っていたし、阿吽の通達があつたことは十二分に考えられる。

実際、一斉検挙で勾留された外国人69人のうち、40人が本国送還になつている『外事警察概況』。法処置では、夫妻と交流のあつた小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）教師のダニエル・ブルック・マッキンノンは告訴取消、国防保安法で拘束の岩手県の宣教師ギルバート・シュレーヤは不起訴と、多くが乗船を前提の身柄解放の処置を受けている。

レーン夫妻だけが例外とされる理由はない。ダニエルやギルバートと同様のはずが、この後の過程のどこかで、何かの障害が起き、重罪へとよじれた、そう捉えれば、その後の展開とも符合してくる。

その障害とは何か。全くの仮説ながら、相被告となる宮澤弘幸の方に、重罪重罰を科さねばならない事情が起きた、とは考えられないか。宮澤へは加重な拷問がかけられ、自白を強制されたことが明かされている。

仮に、国家権力による冤罪の生贄にされる事情があつたとすれば、これも符合がいく。相被告の一方を重罪重罰にして一方をお客さんのままにはできない。

犯意の立証がない裁判

この視点からもう一つ浮ぶのは、犯意の立証がない事件（裁判）という事実だ。一審、大審院（最高裁）を通し、判決を讀

む限り、夫妻から宮澤弘幸らに軍事機密の探知を求めた事実はなく、強要はおろか、教唆すらした事実も見られない。

判決にあるのは「出入りする學生等を懐柔利用し、……旅行談、視察談を爲さしめ……」（ハロルド一審判決）「座談旅行談等を爲さしめ 其の間、堪能なる日本語を駆使して巧に軍事事項に付 質問詮索する方法に依り……」（ポーリン一審判決）と「探知」の経緯を断じるだけで、詰めて言えば、極めて受け身の「探知」だったと、逆に証明している。

これは宮澤弘幸の判決も同様で、「夫妻の歓心を購はんが爲我軍事上の秘密を探知して」とあるだけで、頼まれもしないことを勝手にやつたと判定している。国家を危機に陥れる罪だとして、犯意の立証もなく懲役十五年の重罪を科したということは、その意味において恐ろしい。

これも、裁判がいずれかの段階で、重罪ありき、に転じたとすれば底が見えてくる。花伝においても、夫妻に探知行為の事実がないにも関わらず「探知罪」をつけた矛盾について論証しているが、これも宮澤重罪との兼ね合いで、「探知罪」を付加しなければ重罪を科せないためだった。

つまり、一連の矛盾は、全てどこかで、重罪科罰に転じたことで、辻褄の合わない辻褄を合わせたことによる。そう捉えれば全て辻褄が合つてくるという全く酷い話になつてくる。

言い方を替えると、判決主文（罪刑）と判決理由には段差があり過ぎる。重罪を科しうる理由とはなっていない。

もとより、一篇の手記だけで、ここまで踏み込むのは新たな危さを伴う。だが、思い返されるのは、「上田仮説」の上田弁護士による次なる述懐である。

「間違ひは、多くの場合『思い込み』の強さに発しているよう

です。しかし同時に、多少は『思い込み』がないと、なにも新しい知見は得られません。そのへんの加減が難しいようです」思い込みは大胆に。検証は徹底して手を抜かない。この視座は座右のどこかに留め置いていいように思える。

なぜ、宮澤弘幸とレーン夫妻だったのか
なぜ、かくも重刑だったのか

改めて、このなぜ、が迫る。

(以上、本編「史料検証」3頁参照)

◇逮捕と検挙（総総Ⅱ17頁）

召喚状は携行し読み上げた

総総では、ポーリン・レーンの検挙に関連し、上告趣意書を引用して「逮捕令状どころか、口頭でも身柄拘束の理由が示されていなかったことが窺われる」——と記述（17頁下段10行目）している。これは、検察官に逮捕状抜き勾留権限を与えたことを前提にしての情景を映しとつたものだ。

ところが、手記には「私をスパイ容疑で逮捕する令状を読み上げた」とある。これはポーリン自身が書いた上告趣意書と矛盾していて、手記の方に思い違いがあると思われるが、逮捕状ではなく、召喚状であったなら、読み上げた可能性はある。（本編「史料検証」4頁参照）

改めて国防保安法（第16条）をひもとけば、検察官は自らの職権で被疑者を召喚、勾引、勾留できたが、この検察官の命で司法警察官が検挙に臨むには、自ら召喚状を発する規定になっていて、これには召喚を命じた検察官の職氏名と、検察官の命令によって召喚する旨が記載される規定となっている。

したがって、ポーリンは、この召喚状を逮捕状と思い込んだ可能性が強いが、「口頭でも身柄拘束の理由が示されていないかった」との記述は正確を欠いた。手記の雰囲気からも、勾留にはそれなりの節度はあったと思われる。

◇教師失職（総総Ⅱ23頁）

始業直前に自宅待機を命じられた

総総では、教師失職について「敵国人となったこと自体が解職・追立ての理由にされた」と記述しているが、補足が必要だ。

先の項のように、12月8日、レーン夫妻は始業前に総長（学長）に呼びつけられ「自宅待機」を申し渡された。

夫妻にとつては、この通告が12月8日に始まる全ての始まりになる。自宅待機の学内処分の後、検挙され、拘束され、年明け年度末の雇用契約の一方的な解約によって解職された。

総長が検挙を予知していたか否かは知れない。しかし早朝始業前に総長室に入っていたのだから、この日あるを想定して準備はしていたに違いない。

家族の面倒は警察官がとりもった

また、この項で、総総は、取り残された双子の姉妹と病弱の老父の置かれた状況について「当の警察（行政）も北大も全く知らぬ顔」（23頁下段、後から5行目）と記述している。

だが手記とB記事は違う情景を記している。手記の「B」が諸事わきまえていたようで、家宅捜索が段落したところで、フランシスコ修道会の天使病院に伴っている。Mr.Xとフランシスコ修道会との関係は不明ながら、仲立ちはMr.Xに他ならない。

「⁵」は、以後もたびたび病院・施設を見舞い、留置場に差し入れし、消息を伝えている。ポーリンも感謝で接している。手記のとおりであれば、「知らぬ顔」は誤りであり、訂正しなければならない。（本編「史料検証」6⁵参照）

◇北大への望郷（総総1128⁵）

ポーリンは同志社の教師だった

戦後、ポーリンが同志社大学の総長に宛てた手紙について触れる中で、総総では「ポーリンの母校である同志社大学」と記述している。（28⁵上段、後から5行目）

だが、ポーリン「手記」を見つけた吉田栄一さんの調査（「ポーリンさんの青年期／送還されても心は札幌に」¹¹既出）では、同志社大学の在籍記録、および同志社女子大学の同窓会卒業生名簿でもポーリンの名は見当たらないという。

一方、吉田さんの調査では①19歳から24歳まではアメリカ東部州にいて、ラセルセミナリー（マサチューセッツ州）、ミドルベリー・カレッジで学んでいた②同志社女子大学の前身である同志社女学校専門学部の職員録『私立同志社女学校専門学部職員調（大正七年十月一日調）』には「教員免許認可学科 英語 英文学科 西洋料理、受持学科 英語 英文学 料理、毎週受持時間表五、職名 講師、就職年月 大正七年二月、卒業学校名 及學位称号 ベルモンド州ミッツルベリーコレッジ バチエラーオブアーツ、府縣族籍北米合衆国、氏名 ポーリン・ローランド、生年月 明治二十五年十二月」とある③同志社女子大学史料センターにはポーリン自筆の履歴書が保存されている——とある、と明かしている。

システアは流感死だった

吉田調査にはもう一つ大事な発見がある。ポーリンの初婚の夫・ウィリアム・モリス・システアは戦死ではなく、インフルエンザによる病死だった。『Brown university in the war』およびミドルベリー大学の新聞・年報類に拠る確認で、システアは1918年11月28日生れ、ブラウン大学、ミドルベリー大学を経て、1917年5月、入隊。第17野戦砲兵隊に配属（少尉）され、フランス戦線で右足に負傷、1918年4月、サウスカロライナ州・ジャクソン基地に転じている。

同年7月20日にポーリンと結婚。8月中尉、10月大尉。11月29日、死去。スペイン風邪といわれたインフルエンザで、基地でも多くの死者を出した。

総総（29⁵上段、最終行）では、「流感で病死」を一部伝として付記しながらも「流感死を裏づける文献は見当たらない」として、当時、定説とされた「大戦で戦死」を採っている。

同じく総総63⁵（中段22行目）でも「ポーリンは同志社大学で学び、結婚し一女に恵まれたが、ほどなく夫は第一次世界大戦で戦死した」と記述している。訂正しなければならない。

2、本件・冤罪解明への発端（総総115⁵ほか）

宮澤レオン事件の井戸を掘ったのは誰か。総総では、上田誠吉弁護士『戦争と国家秘密法』（1986年イクオリティ刊）をさがけとし、これを読んだ秋間浩が上田弁護士へ深堀り要請の手紙を書き送り、結実して同弁護士による『ある北大生の受難』となり、公知への発端となった——としている。

これで大筋、間違いはないのだが、この間の経緯を少し詳しく追ってみると、少々短絡や思い込みが重なって、新たな伝説を生みかねない危うさが広がっていることがわかった。

たとえば、総誌58頁には「9月、所用で日本に来ていた秋間浩さんは、上田誠吉弁護士著『戦争と国家秘密法』と10月から朝日新聞に連載された記事『スパイ防止ってなんだ』を読んで感銘を受け、帰ってから妻・美江子さんに日本の政治情勢を話した」等々（上段15行目以降）とあって、住んでいたアメリカから単身で来日し、たまたま感銘を受ける著書や記事に出合っ、上田弁護士宛ての手紙に発展したと伝えている。

だが事実は少し違う。『スパイ防止ってなんだ』（1986年10月12日付朝刊から21日付まで計10回）の第一回の記事によると（「秋間」）美江子さんは米商務省技官の夫浩さんと共に、わざわざ日本へ里帰りした。兄の無念を日本の人たちへ訴えるのに、かつての親友の証言がどうしてもほしかったとあって、手紙を書く前に、既に大きく踏み出して、と分る。

友人とは、フォスコ・マライーニで、この年の国際交流基金賞を受賞したのが発端。この授賞式のためにイタリアから来日することになり、これを知った秋間夫妻が駆けつけた。この千載一遇を知った連載記事の筆者・薮下彰治朗記者（故人）が再会をルポし、連載の一回目に取り込んだのである。

結果からみれば、秋間夫妻はこの記事の仕上げのために来日したともいえる。

井戸を掘るのは並みじゃない。薮下記者は、おそらく上田弁護士の『戦争と国家秘密法』から「外事警察概要」を知り、そこから札幌の斎藤忠雄（宮澤弘幸の弁護士）に行き着き、菩提寺の常圓寺を経てアメリカ在の秋間夫妻にまでたどり着いたの

ではないだろうか。ここにマライーニの慶事が加わり、大きく膨らんで、連載の最終回には秋間夫妻とマライーニの三人が同席しての写真が載っている。

連載記事は、十月恒例の「新聞週間」からみの企画で、宮澤レーン事件を初めて全国に報じるものとなった。記事には、このあと、秋間美江子が語り部となって語り継いでいく要点が織り込まれてもいる。秋間浩から上田弁護士への手紙には、これだけの背景と土壌があつてのことだった。

その意味では最初に井戸を掘ったのは薮下記者で、深堀したのが上田弁護士ということにもなる。

ただ記事には、検挙を逮捕と記すなど、いくつか事実誤認や取材不十分がみられ、孫引きには注意が必要だが、宮澤・レーン事件を検証していく上での歴史的文献としてもしつかり位置付けておくことが大事と考える。

3、全資料目録 訂正・追加（総誌145頁）

【1】冤罪の発生（146頁）

③『Prison Life in Japan』＝Middlebury College の News Letter に載ったポーリン・レーンの手記。同ホームページに収録 <https://archive.org/details/middleburyNewspapers>

1947-01-01/page/n13

④『LASELL LEAVES』WINTER 1945＝ポーリン・レーンが母校 Lasell College のゲスト・スピーチに招かれ講演（1945年11月20日）したときの講演要旨。内容は『Prison Life in Japan』と重なっている。

<https://archive.org/details/lasellleaves7072lase/page/n89>

⑤ B 記事 I 切抜き複写 「Memory of Own Jap Horrors Fade For Bay State Twins As Gripsholm Bringes Parents Given Up As Dead」 By Katherine F. Berry＝レーン夫妻の双子の末娘が第一次日米交換船でアメリカへ送還された後、夫妻が送還された第二次船までの間の日々を、姉妹から聞き取って特集した。掲載紙、掲載日とも把握できていないが、1943年11月末から12月初めの紙面と思われる。（真相事務局蔵）

⑥ B 記事 II 切抜き複写 「Their Ship Came In」 By Katherine F. Berry＝前項⑤を圧縮した同内容の記事で、同じころの発刊と思われる。（真相事務局蔵）

【9】事件の背景および人物像に迫る著作・文献（153頁）
（ロ）その二（155頁）

⑧ レーン夫妻感謝状の記事Ⅱ「届いた経路、経緯とも不明だが、内容から推して偽書と断じることはいかない」と記述しているが、この部分削除。ポーリン「手記」の発見で不明が解けた。

⑭ 『封印された殉教 上・下』Ⅱ佐々木宏人著・フリープレス刊（2018・10・31）。敗戦3日後に憲兵に暗殺された戸田帯刀神父と宮澤・レーン事件の接点等を記録。（真相事務局蔵）

⑮ 『札幌キリスト教史―宣教の共なる歩み』Ⅱ鈴江英一著・一麦出版社刊（2019・12・21）。「戦時への順応と受難の項」で宮澤弘幸とレーン夫妻の冤罪事件を紹介。（真相事務局蔵）

⑯ 『レーン夫妻を語り継ぐ その3』Ⅱ「宮澤・レーン事件を考える会」が、学習資料 No.6（2019・7・16）として発行。（同会、真相事務局各蔵）

▽講演「レーン姉妹と岩手の宣教師一家」（吉田栄一）

▽新たに発見された資料（岸本和世ほか。新資料の訳文）

▽レーン夫妻の思い出（記憶に残る光景と言葉Ⅱ野上〈渡辺〉絃子、ムツタカⅡ楠本陽子、レーン夫妻のことⅡ青木秀通、始めなければすべて良しⅡ中岡章）

⑰ 『北海道大学 ピースガイド』Ⅱ「ビーアンビシヤス9条の会・北海道編刊。▽「宮澤・レーン冤罪事件」（中原豊司）ほか
※未確認文献 『Exchange Ship』 Max Hill, New York; Toronto: Farrar&Rinehart, 1942

【20】真相を広める会の記録・文献（162頁）

⑦ コラム「冤罪忘れるな！」続稿 国家権力冤罪の主犯／上

告趣意書を著した／軍機保護法の異解明／軍機保護法付帯決議／軍機保護法拡大強化／道連れで検挙・有罪／応召・服役・消息不明／消息埋もれたいま一人／火を点けた手紙の主／北海道大学夢風景／没後72年生誕100年／国家総動員法81年／見るな聞くな言うな／狭く、動けず、寒く／授業は教師の義務だ／僕はスパイ？冗談でしょ！／激動の1945年10月／無責任の極みの御前会議／国家犯罪に「時効」はない／冤罪証明の逆転証拠／焼却逃れた冤罪の記録／「特高の底意」を白日に／最初の大きな活字／少女たちが体で伝えた

⑩ 『国家権力犯罪に「時効」はない「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」Ⅱ2019年10月1日刊

4、新聞・NHK・団体機関紙誌等の報道目録 追加

（総総Ⅱ164頁）

◆2018年

2・23 しんぶん赤旗Ⅱ「暗黒の冤罪、二度と 戦前の宮澤・

レーン事件 命日に集い」

2・25 毎日新聞Ⅱ「苦しみ今も消えぬ スパイの疑いかけられ 元北大生宮沢弘幸さん病死71年」

7・15 治安維持法同盟立川昭島支部「不屈」Ⅱ「国家権力犯罪を糾す 宮澤・レーン・スパイ冤罪事件『総資料総目録』完成」

12・8 毎日新聞多摩版Ⅱ「スパイの家族77年の苦しみ レーン・宮澤事件考える集い」

◆2019年

2・24 毎日新聞都内版Ⅱ「思想統制の犠牲者悼む スパイ冤罪・宮沢さん 50人墓参り」

◇しんぶん赤旗Ⅱ「思想統制の歴史学ぶ集い 北大スパイえん罪 繰り返させない」

3・1 毎日新聞北海道版Ⅱ「宮沢さん命日『忘れない』誓う 北大生スパイ冤罪事件 東京・新宿」

3・16 治安維持法同盟「不屈」Ⅱ「顕彰碑探訪・スパイ冤罪事件に陥れられた宮沢弘幸」

◆2020年

2・23 毎日新聞都内版Ⅱ「事件を伝え続ける スパイ冤罪元 北大生命日に墓参

『引き裂かれた青春』花伝社版 訂正・補足

▽17頁10行目Ⅱ自宅に居て、普段通りの一日が始まるうとした矢先、土足の特高が押し入ってきた

↓削除して修正。本編「12・8一斉検挙」、および「史料検

証」参照。

▽25頁7行目Ⅱ徹底した尾行によって狙いをつけた対象者の日常生活を洗いあげた特高特有の手口

↓削除して修正。本編「史料検証」参照。

▽33頁11行目Ⅱ日常会話なら日本語で堪能だった

↓「堪能」ではなく、「不自由しなかった」くらいが妥当。

▽38頁7行目Ⅱポーリンは同じ大戦で初婚の夫を戦死で奪われている

↓削除し修正。本編「システアは流感死だった」、および「史料検証」参照。

▽39頁3行目Ⅱ（三）

↓漢数字「二」に訂正。

▽76頁9行目Ⅱポーリンは京都・同志社大学で学び、……ほどなくウイリアムは第一次世界大戦で兵役に就き、戦死した

↓削除し修正。本編「ポーリンは同志社の教師だった」、「システアは流感死だった」、「史料検証」参照。

▽80頁最後の行Ⅱ異変が生じたことは北大当局も把握していたに違いないが、どう対応したのかの記録は残っていない

↓削除し修正。本編「始業直前に自宅待機を命じられた」および「史料検証」参照。

▽113頁14行目Ⅱ官舎に病身の祖父ヘンリーと老幼三人が取り残され、見かねたフランシスコ修道会が引き取り、ほどなくヘンリーは「天使病院」で亡くなっている

↓削除し修正。本編「家族の面倒は警察官がとりもった」および「史料検証」参照。

▽同18行目Ⅱ二人の英語はたどたどし過ぎた

↓削除し修正。「たどたどし過ぎた」というより、ほとんど話

せず、聞けず、読み書きも出来なかった。送還後の会話習得で、RとLの発音区別に手こずったというから、姉妹の言語生活は、ほとんど日本人だったようだ。総総64頁（上段10行目）にも「英語があまり話せなかった」とある。本編「史料検証」参照。

▽121頁3行目（ハロルドは）一九六三年の夏、腸にできたポリプを取る手術中に脂肪が血管に入るという事故が起き、八月七日、あつけなく七十歳の生涯を閉じることになった

↓補足が必要。ハロルドの病室と向かい合わせで入院していたという医師（当時・小学校低学年）の記憶では「ヘルニア手術後のおそらくは術後合併症の悪化が原因」という見立てがある。総総29ページ上段「死因二説の解明」参照。確認はできないが、決めつけないのがいい。

▽129頁2行目（九月、所用で日本に来ていた秋間浩は、上田誠吉・弁護士著書『戦争と国家秘密法』と十月の新聞週間企画で『朝日新聞』に連載された記事「スパイ防止ってなんだ」を読んで心揺すぶられ、ボルダーに帰ってから妻・美江子に日本での政治情勢を話した

↓削除して修正。本編「本件・冤罪解明への発端」参照。
▽同9行目（「薮下彰治」とあるは「薮下彰治朗」に訂正。

『国家権力犯罪に “時効” はない』訂正・補足

▽10頁上段11行目（夫は第一次世界大戦で戦死（病死との説もあるが出所不明で確証はない）

↓削除し修正。本編「ポーリンは同志社の教師だった」、「システアは流死だった」、「史料検証」参照。

▽21頁上段10行目（蓋然性では、早朝それぞれの自宅で検挙↓削除して修正。本編「12・8一斉検挙」、および「史料検証」参照。

▽26頁下段7行目（その時、娘2人が登校していたか否か定かでないが、老父が臥せっていたのは間違いない
↓削除して修正。本編「12・8一斉検挙」、および「史料検証」参照。

▽同9行目（特高は、それを知りながら家中掻き回し、病床の老人と幼子を放置して引き上げた

↓削除し修正。本編「家族の面倒は警察官がとりもった」および「史料検証」参照。

▽27頁上段14行目（古いオルガンはポーリンが戦死した先夫への思いを込め寄進

↓削除し修正。本編「ポーリンは同志社の教師だった」、「システアは流死だった」、および「史料検証」参照。

▽31頁上段11行目（だから英語は覚えなく、
↓削除し修正。ほとんど話せず、聞けず、読み書きも出来なかった。送還後の習得で、RとLの発音区別に手こずったというから、言語生活は、ほとんど日本人だった。

◇活動経過・続

(2018・1・29～2020・6・1)

【2018年Ⅱ続】

- 1・29 『宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録』刊行
- 1・31 植村裁判・東京訴訟第11回口頭弁論。▽報告集会「記者への攻撃と報道の自由」(望月衣塑子Ⅱ東京新聞記者)
- 2・16 植村裁判・札幌訴訟第10回口頭弁論。▽報告集会「慰安婦問題はなぜタブーにされたのか」(池田恵理子Ⅱ私たちの戦争と平和資料館館長)
- 2・22 宮澤弘幸・顕彰墓参。東京新宿・常圓寺、60人。▽集会「宮澤・レーン事件を忘れない！北大・戦後世代をつなぐOB・OGのつどい」(常圓寺祖師堂ホール)
- 3・1 「事務局たより」第21号(『総資料総目録』完成)
- 3・23 植村裁判・札幌訴訟第11回口頭弁論。本人尋問。▽報告集会
- 4・1 「事務局たより」第22号(「捏造攻撃」が捏造だった 植村隆・名誉毀損札幌訴訟傍聴記・水久保文明)

- 4・25 植村裁判・東京訴訟第12回口頭弁論。▽報告集会
- 4・30 NPOさっぽろ自由学校「遊」

2018年前期講座「記者たちへの熱教室」Ⅱ「進む政治への私物化、瓦解する官僚たち——なぜ菅長官の会見に臨み続けるのか」(望月衣塑子Ⅱ東京新聞記者)

- 5・1 第89回中央メーデー(東京・代々木公園)。本会幟立てる。全労協は日比谷公園で。連合は4・28メーデー集会。
- 5・3 憲法集会(東京・臨海広域防災公園) 6万人。本会幟立てる



- 5・8 「事務局たより」第23号(5・3憲法集会2018 6万人が結集)
- 5・15 岸井成格・毎日新聞記者、死去、73歳。秘密保護法強行採決後の本会集

会(2014年2月22日)で講演するなど連帯

- 5・27 「美ら海壊すな、土砂で埋めるな5・27国会包囲行動」 1万人参加。本会幟立てる

6・1 「事務局たより」第24号(辺野古米軍基地建設を許してはならない！美ら海壊すな、土砂で埋めるな5・27国会包囲行動)

- 6・19 「6・19国会議員会館前行動」。戦争法強行成立以来33回目。2200人参加。本会幟立てる

7・1 「事務局たより」第25号(安倍9条改憲)

- 7・5 『えんれい草』休刊。北大内海ゼミOBによる刊行で、本会からも度々寄稿、行動でも連帯してきた

7・6 植村裁判・札幌訴訟第12回口頭弁論。原告最終陳述。▽報告集会

- 8・1 「事務局たより」第26号(「暮らし」をぶっ壊した安倍政治の罪)

8・18 『封印された殉教 上・下』(佐々木宏人)刊行。敗戦3日後に、元憲兵と思われる男に殺害されたカトリック神父・戸田帯刀の人と業績を追った労作で、本件とも関わっており、本編資料に収録している

9・5 植村裁判・東京訴訟第13回口頭弁論、原告尋問。▽報告集会「慰安婦報道の真実とは」(香山リカ、崔善愛、新崎盛吾)

9・8 館野鉄工所米軍機墜落事故慰霊祭・犠牲者追悼平和行進。工場の5人が犠牲となった被災地を記念公園にする運動が進んでいる

10・1「事務局たより」第27号(玉城デニー知事は沖縄県民の勝利)

11・3 止めよう!憲法発議11・3国会前大行動。1万8000人。本会幟立てる

11・9 植村裁判・札幌訴訟判決。原告敗訴の不当。▽報告集会

12・1「事務局たより」第28号(止めよう!憲法発議11・3国会前大行動)

12・6 芸術と憲法を考える連続講座第12回「山と語学を愛した大学生はなぜ逮捕され命を奪われねばならなかったのか?」(芸大上野キャンパス)。本会・山野井孝有が招かれ質問に答える。160人

12・10『戦争はいけません―戸田ノブ99歳の思い』(山野井孝有・後藤眞理子)刊行。戸田ノブは戦場の看護婦。

12・19 総がかり行動。国会議員会館

前。2800人。本会幟立てる
12・28「原発いらない」金曜日行動。官邸、国会前に350人

【2019年】

1・1「事務局たより」第29号(総がかり行動 断固継続)

1・28「安倍政権退陣!」1・28国会開会日行動。450人



2・1「事務局たより」第30号(安倍9条改憲NO! 辺野古土砂投入即時中止! 共謀罪廃止! 安倍政権退陣!)
1・28 国会開会日行動)

2・22 宮澤弘幸・顕彰墓参。東京新宿・常圓寺、60人。本会幟立てる。▽集会

「宮澤・レーン事件を考える集い」(北大・戦後世代をつなぐ会)(常圓寺祖師堂ホール)。講演「よみがえる戦時体制―大学と教育をめぐって」(荻野富士夫・小樽商大名誉教授)

3・1「事務局たより」第31号(「曲がり角越えた日本」に警鐘)

3・17 山本宣治終焉の地記念プレート除幕・つどい。東京千代田区神田神保町1の103

4・1「事務局たより」第32号(国家権力犯罪を許すな!第1回「山本宣治終焉の地記念プレート除幕・献花式」)

4・25 植村裁判・札幌控訴審(高裁)第1回口頭弁論。原告ら意見陳述。報告集会

5・3 憲法集会(東京・臨海広域防災公園)野党4党首ほか6万5千人。本会幟立てる

5・10 植村裁判・東京訴訟第16回口頭弁論。判決公判延期の理由明示を求めたが棄却。▽報告集会

5・13「事務局たより」第33号(5・3憲法集会 安倍政権退陣!)

6・26 植村裁判・東京訴訟判決。名誉

毀損を認めながら原告敗訴の不当判決。報告集会

7・1 「事務局たより」第34号（植村裁判東京訴訟「不当判決」）

7・2 植村裁判・札幌高裁第2回口頭弁論。原告意見陳述。▽報告集会（李富榮・自由言論実践財団理事長が講演）

8・1 「事務局たより」第35号（戦後最大の人権侵害「レッドパージ」）「国家権力犯罪に『時効』はない！」▽特集第1回）

9・1 「事務局たより」第36号（弾圧犠牲者への謝罪と賠償を要求▽特集第2回）

9・16 さよなら原発全国集会（東京代々木公園）。8000人。本会幟立てる。

9・19 福島原発事故裁判・東京地裁が東電元幹部に無罪。報告集会を抗議集会に切り替える。

10・1 「事務局たより」第37号（人権と民主主義を守る▽特集第3回）

11・3 憲法集会 in 国会正門前。「新聞OB九条の会」と共に、本会幟立てる。

11・8 「事務局たより」第38号（安倍首相に憲法を変える資格はない！）

11・18 国際武器見本市（日本の国際

防衛・セキュリティ総合展示会▽千葉・幕張メッセ）に反対し、武器取引反対ネットワーク（NAJAT）が会場入口で抗議集会。

12・1 「事務局たより」第39号（青春と人生を引き裂いた「戦争」「戦争と一橋生——満州・シベリアで亡くなられた10人の軌跡」展）

12・16 植村裁判・東京高裁第2回口頭弁論・結審

【2020年】

1・1 「事務局たより」第40号（安倍政治を許さない▽断固たる野党共闘を）

1・20 国会開会日行動

2・6 植村裁判・札幌高裁判決。控訴棄却の不当判決。▽報告集会

2・7 「事務局たより」第41号（安倍内閣打倒へ断固行動を！）

2・22 宮澤弘幸・顕彰墓参。東京新宿・常圓寺、20人。集会は中止。

3・3 植村裁判・東京高裁判決。控訴棄却の不当判決。▽報告集会

3・7 「事務局たより」第42号（植村裁判東京控訴審も不当判決。札幌、東京とも闘いは最高裁へ）

▽公告「本会が活動を休止したことは

なく、他組織に本会を引き継いだこともない」。誤った記述を報じた「宮澤・レーン事件を考える会」に訂正を申し入れ。

4・6 「事務局たより」第43号（内閣情報調査室の監視体制に徹底警戒を！）

5・1 「事務局たより」第44号（現代政治につながる謀略事件『スパイ 関三次郎事件』（佐藤哲朗）刊行）▽特集第4回）

5・19 検察庁法改正反対「5・19緊急国会議員会館前行動」。本会幟立てる



5・20 「事務局たより」号外（検察庁法改正は廃案に！）

6・1 「事務局たより」第45号（スパイ冤罪事件被害者の証言があったーコラム・冤罪許すな（番外編））

◇「補遺」発行にあたって

本会事務局は、2018年1月に「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録」を発行し、冒頭で「国家権力犯罪を糾し、新たな運動を巻き起こす一助に」と提起した。続いて2019年10月に「国家権力犯罪に『時効』はない―宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」と題した冊子を発行した。一貫して追及してきたのは、「国家権力犯罪を許してはならない」である。

「総資料総目録」は、所期目的達成の一助になることを期待して、本会・会員のほかマスコミ、学者・弁護士、諸団体、国立国会図書館、主要公共・大学図書館にも寄贈した。図書館からは受領の文書が届くとともに、多くの方々から制作費カンパを頂いた。感謝したい。

*

今年四月、「スパイ関三次郎事件―戦後最北端謀略戦」が河出書房新社から刊行された。「スパイ」の表現にドキンとした。著者の佐藤哲朗さんは旧・樺太生まれで元毎日新聞社会部記者。贈ってくれた本書に同封の手紙に「(本書は) 65年前の事件ですが、その源流を遡れば現代政治

にも深くかわっています。安倍政権下で成立した『スパイ防止法』(特定秘密保護法)、そして戦争への道につながる集団的自衛権の行使、この危うさに連なる事件です。戦後の特異な時代背景の中で起きた特異な事件だといって闇に葬っておくことはできない。いつか来た道へは、決して逆流させない、そんな思いも込めました」。宮澤・レーン・スパイ冤罪事件につながる。再びドキンとした。

*

政府・与党は5月18日、検察庁法改正について開会中の国会での成立見送りを決めた。当然である。本会事務局は、衆院内閣委員会・松本文明委員長に対して5月13日、『検察庁法の一部改正』案(第4条関係)を分離し、法務委員会において慎重な審議が行われるよう要請します」との要請をFAX送信した。

政府・与党の暴挙をストップさせたのはツイッター世論であるとともに、5月15日、松尾邦弘・元検事総長ら14人の検察OBが法相に出した意見書である。検察官と言えば、国民弾圧事件や刑事事件で冤罪を作り出した権力機関の一員であることは事実であるが、今回の検察OBの意見書は、高く評価したい。今後、こう

した真つ当な検察官が増えていくならば冤罪事件を繰り返させない確かな保障となるからだ。

*

国家権力は、とりわけ弾圧・冤罪事件の真相を徹底して隠蔽、廃棄する。記録として残されることが再び弾圧・冤罪の温床になっていく。現に森友問題で公文書改竄強要に抗議して自ら命を絶たざるを得なかった近畿財務局職員・赤木俊夫さんの残酷が現出している。

記録を残すことの重要性について一例を紹介したい。戦後サンフランシスコ平和条約と安保条約の交渉の最前線にたった西村熊雄・外務省条約局長は、全交渉過程を8分冊・3500頁にのぼる「平和条約の締結に関する調書」にまとめ上げた。当時のアメリカとの交渉は、連戦連敗であり、結局アメリカ側の思いとおりの条約を結ばれてしまった。

しかし当時の外務省条約局には、それを詳細に記録し、将来の国民の判断にゆだねようとの姿勢があったのだ。この詳細は『日本はなぜ「戦争ができる国」になったのか』(矢部宏治・集英社インターナショナル刊)が記録している。

(福島 清)

宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録

史料検証

ポーリン手記とベリー記事

THE MIDDLEBURY COLLEGE NEWS LETTER

Prison Life in Japan

By MRS. (PAULINE ROWLAND, '16) LANE

THE DAY that followed the bombing of Pearl Harbor dawned bright and cold in Sapporo, Japan. After getting Father Lane dressed and settled in his favorite chair, I hustled to Hokkaido Im-



Wintertime at Hokkaido Imperial University

perial University to teach an eight o'clock class in communications. Shortly after arrival, I was directed to report to the President of the University who in turn informed me that war had broken out between the United States and Japan and that "you will not teach until further notice." Returning home I was met by my husband, Harold, who told me that he likewise had been forbidden to teach.

Father Lane and I were having lunch and Harold was at the bank, when the front doorbell rang. At the door there was a group of eleven men,



Imperial University

and front and every inch of me in clear sight of the guard.

Sitting down on the floor, I tried to think as to what the future held for me and my family. After what seemed ages, the big outer door opened and the sound of Harold's voice reached my ears, as he was placed in a nearby cell. It filled me with comfort and reassurance, and yet at the same time with a deep concern. Shortly after the jailing of Harold, our police friend, Mr. X, came with blankets and toilet articles which he had brought from our home. He whispered that Harold was

寡黙とされていたポーリンが手記を残していた

Memory of Own Jap Horrors Fade For Bay State Twins As Gripsholm Brings Parents Given Up As Dead



Katherine and Dorothy have afternoon tea. Here, in the George H. Howland, of Astoria, they pose at the tea table.

All was confusion at home. Police searching the house, the servants frightened, their old grandfather, Mr. Hans Lane, muddled, bewildered, in a corner. The twins were told they could not return to school, nor could they be out of doors.

In "the past," they were not allowed outside the convent compound, and were not permitted to marry.

They suffered from cold, lack of proper food and clothing, and were not permitted to see their parents. No reasons were given, no explanation was made for the situation. They were kept there, even if they would remain. Touched by the twins' plight, the mother and father signed an Eurasian girl, named "Mitsie," with the intention, to marry her to one of the twins.

FORTUNATELY, the children were somewhat concerned as to Japanese law, ways of firing guns, and the possibility that they would have succumbed to their hardships.

"This was war, according to reports brought back by fathers and mothers," said the twins. "We did not see war, we saw the little daughters, between the six months between Pearl Harbor and the sailing date had not passed, and the war was being kept for the pot."

Said the twins' grandmother "who had lived for a time in their Japanese home," as the twins sat meekly in front of me, "I was not permitted to teach at Honolulu for bettering to see through the daily happenings. No matter what was alone, he must help up his duty. That's all it is."

"To think that foolish day

None of the many Japanese friends came near to console or help, except their kind policeman who one day brought the twins some American candy which he found in the house, and two German teachers from the University.

incapable of such an attitude, to desert old friends to embrace, but in Japan today, the military arm of the law is few and strong. People are awestruck by the money alone, and neither how horrible.

The Japanese also have a superstition about causality. They think it was always a politician

幼き姉妹の目を悲しめた12.8レーン宅の情景

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会
事務局

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会 <http://miyazawa-lane.com/>

事務局たより

第45号 2020年6月1日 chyda-kr@f8.dion.ne.jp
◇事務局 101-0061 千代田区神田三崎町2-19-8 杉山ビル2F
千代田区労協気付 T:03-3264-2905 F:03-6272-5263

スパイ冤罪被害者の証言があった

ポーリン・レーンの手記が母校の News Letter に

コラム
冤罪許すな！

<番外編>

事件に寡黙と思われた「スパイ冤罪事件」の被害者ポーリン・R・S・レーンに「手記」があった。母校である Middlebury College の News Letter 1947-01-01 に掲載された「Prison Life in Japan」で、同校のホームページに収録されている。

検挙時の状況から、留置場・拘留所での扱われ方など、初めて知る事実を含み、本件解明の空白部分を埋めると同時に、これまで事実とされてきた「事実」に書き換えを及ぼす第一級の史料といつていい。執筆の時期は、戦後1年余、1947年の末で、検挙からは5年余の後と思われる。

発見したのは、アメリカ送還後のレーン夫妻の動静を丹念に追っていた本会・会員の吉田米一さんで、本会刊『総資料総目録』編纂のおりにも寄与いただいている。刮目した手記と発掘に敬意を以て閲読し、本件冤罪の解明にかかわる要点を検証する。



ミドルベリー・カレッジ・ニュースレター 1947.1.1
https://archive.org/details/middleburyNewspapers_1947-01/page13

していて、同様に命じられたと知る。

検挙の刻限を特定する記録は、これまで確認されていない。旧・内務省の記録に「午前7時以降……一斉検挙を実施せり」(『外事警察概況』)とあり、地元・北海道の『北海タイムス』(現・『北海道新聞』の前身)でも「拂曉一斉検挙」と報じていたから、「早朝」と捉えるのが一般化していた。

また、同居のお手伝い(石上茂子)を併せ、3人が同時に検挙とされていたが、これも違った。最初にポーリン、次いで帰宅したハロルド、さらに後になって石上だった。これらは、手記に綴られた時間の流れに矛盾がないことから間違いないと思われる。

検挙には「召喚状」が示された

手記によると、検挙に際し warrant of arrest を読み上げたところ。通常、逮捕状と訳されるが、これは当時の法制からいってあり得ない。戦争法の一つ・国防保安法第17条によって、検事は裁判所に逮捕状を請求することなく被疑者召喚ができ、故に、当時の司法当局も現場も「検挙」と称している。

ただ、この際に、検事に検挙を命じられた司法警察官は召喚状を発する規定になっており、これには召喚を命じた検事の職、氏名と、その検事の命令によって召喚する旨を記載する規定になっている。ポーリンはこれを逮捕状と受け止めたものと思われる。

半面、検挙・家宅捜索が暴虐無尽に行われたと思われるが、そこその作法はあったと知れる。次の



北大構内の外国人教員官舎でくつろぐレーン一家

第二部 史料検証

ポーリン手記とベリー記事

事件に寡黙と思われていた「スパイ冤罪事件」の被害者ポーリン・R・S・レーンに手記があった。母校である Middlebury College の News Letter 1947-01-01 に掲載された「Prison Life in Japan」で、同校のホームページに収録されている。

加えて、手元の英文記事に、手記の内容と重なる記述のあることもわかった。アメリカの記者・キャサリン・F・ベリーが、アメリカに送還されたレーン夫妻の双子の末娘から聞き取った一部始終を特集した 1943 年の記事で、半ば埋もれていた。

被害者自身による記録は、同じポーリンによる上告趣意書に次ぐ発見で、中身も濃く、目を開かせる。検挙時の状況から、留置場・拘置所での様子など、本件解明での空白部分を埋めると同時に、これまで事実と思われてきた「事実」に書き換えを迫る重みがあり、第一級の史料といっている。ベリーの記事は、この検挙時の状況を裏づけており、両史料あいまって、本件検証に新たな視点を広げる。

今回、両史料の検証では、原典を段落ごとに原文のまま紹介し、参考として日本語訳を添え、本会事務局による若干の検証を加える構成にした。「参考」としたのは、訳者には失礼ながら、本件次第から、原文にての把握に重きを願ったのことで、ご理解願えればありがたい。訳者はかねてご協力願っている「日刊ペリタ」主筆・永井浩さんに依頼した。

また項目によっては、本編「正確につたえたい」の記述と重なる部分があるが、本稿の流れを維持するうえから、重複のままとした。

(以下事務局 文責は本会会員・大住広人)



I ポーリン手記

The Middlebury College News Letter 1947-01-01

Prison Life in Japan

By Mrs. (Pauline Rowland) Lane

(日本での獄中生活 ポーリン・ローランド・レーン)

THE DAY that followed the bombing of Pearl Harbor dawned bright and cold in Sapporo, Japan. After getting Father Lane dressed and settled in his favorite chair, I hustled to Hokkaido Imperial University to teach an eight o'clock class in communications.

Shortly after arrival, I was directed to report to the President of the University who in turn informed me that war had broken out between the United States and Japan and that "you will not teach until further notice." Returning home I was met by my husband, Harold, who told me that he likewise had been forbidden to teach.

【参考】

真珠湾爆撃から一夜明けた日、北海道の札幌はよく晴れて冷え込む朝を迎えた。父レーン（ヘンリー・レーン）の身支度をして、お気に入りの椅子に落ち着かせると、私は8時からのコミュニケーション授業で教えるために北海道帝国大学に急いだ。

到着して間なしに、私は学長と連絡をとるように指示され、学長から米国と日本のあいだに戦争が勃発したこと、「追って通知があるまであなたは教えないように」と言われた。帰宅して夫のハロルドと顔を合わせると、彼もおなじように教えることを禁じられたと言った。

早朝一番に雇用停止

【検証】

まず注目は、朝の教室に入る前に総長（学長）に呼び出され、**not teach** と授業停止を命じられた事実だ。北海道大学（北大）に保存の文書では、1941 年 12 月 18 日付の文部省「通牒」（大臣官房秘書課長名）で、アメリカ人・イギリス人教師による授業差し止めが通達されている。

開戦の日に何らかの指示があつての **not teach** なのか、学長独自の判断によるのかは不明。北大は、この後、レーン夫妻の教師としての身分に関する処置の「伺い書」を文部省に提出し、折り返し指示を受け、年度末の 1942 年 3 月 31 日付で、夫妻各々との傭契約を破棄している。

もう一点、気になるのは、この朝の天候を **bright and cold** と記していること。『北大百年史・部局史』では「この日、札幌は薄ら寒く雪のある日であった」とある。

Father Lane はハロルドの父でヘンリー、ポーリンからは義父になる。

手記執筆の時期は、戦後 1947 年の末で、検挙時からは 5 年ほどの後と思われる。掲載誌が筆者の母校同窓生対象である故か、読み手に馴染みのない固有名詞等に省略、割愛がみられるが、おおむね見当はつけられる。

Father Lane and I were having lunch and Harold was at the bank, when the front doorbell rang.

At the door there was a group of eleven men, only one of whom I recognized as a member of the foreign department of police and who had proved many times over to be a friend. Mr. X, as we shall call him, choked up with regretful emotion as he read the warrant of arrest charging me with suspicion of espionage.

【参考】

父レーンと私は昼食をとり、ハロルドは銀行に出向いていると、正面玄関のベルが鳴った。玄関には 11 人の男の集団がいて、そのうちの一人だけは見覚えがあり、時と共に友人づきあいをするようになっている外事課の一員だった。

X 氏と私が呼ぶことにする彼は、申し訳ないという気持ちで声を詰まらせながら、私をスパイ容疑で逮捕する令状を読み上げた。

ポーリン検挙は、昼食時の自宅

【検証】

一番の注目は、検挙の刻限が、**lunch** の最中だった事実。これまで検挙の刻限を特定する記録はなく、旧・内務省の記録に「午前 7 時以降……………一斉検挙を実施せり」（『外事警察概況』）とあることから、早朝と捉えるのが一般化し、半ば定説化している。北海道でも、地元紙の『北海タイムス』（現・『北海道新聞』の前身）が「拂曉一斉検挙」と報じており、違和感なく「早朝」と受け止めてきた。

しかし、早朝の学長指示から昼食に至る手記の流れは自然であり、早朝検挙の「定説」は見直しを迫られる。記憶に基づく断片では、レーン宅の隣のヘッカー宅に居候していた北大卒で助手の瀧澤義郎による「歯医者へ行こうと家を出た時、（連行される）後姿を見た」という言があるが、早朝に歯医者という点で疑問視されていた。この言も、昼どきならば整合してくる。

ただ、鵜呑みはできない。後述の「ベリー記事」によれば、昼どきよりも早い刻限を想起させる記述もある。したがって、刻限特定には、なお検証の余地もある。

また、一斉検挙を一斉同時という意味合いでとらえれば、同時ではなかった。後の段落でも触れるが、ポーリン、ハロルド、石上茂子、そして宮澤弘幸の検挙にかかる臨場がそれ

それにあり、総括検証が必要になる。

召喚状を逮捕状と？

この段で、もう一つの留意事項は、warrant of arrest の記述。当時の法制では、逮捕状の執行はあり得ない。

戦争法の一つである国防保安法第 17 条によって、検事は裁判所に逮捕状を請求することなく、独断で被疑者を召喚することができ、よって、司法当局自身が逮捕ではなく検挙の語を用いていた。

ただこの際、検事の命によって司法警察官が検挙に向う場合は、自ら召喚状を発する規定になっていて、これには召喚を命じた検事の職氏名と、検事の命令によって召喚する旨が記載される。ポーリンはこれを逮捕状と受け止めたのかもしれない。

あるいは、手記を著した時点での記憶の鮮明度にも留意しておく必要がある。検挙後 1 年余の時点で、ポーリンが自分で書いた上告趣意書には「私カ札幌警察署ニ連レテ行カレタ時ニ 如何ナル譯カハ分リマセンテシタ 米國ニ送ラレル迄 或ハ戦争ノアル間 保護サレルト云フコトヲ知ラセラルル爲ト思ヒマシタ」と記してある。

ここには suspicion of espionage の影もない。記憶の記録は大事な史料となるが、記憶には、錯誤、思い込み、さらに後知恵からくる混同がつきまとうことに留意し、決めつけることなく検証を重ねる必要がある。espionage については後でまた触れる。

特高が Friend？

同様、厄介なのが warrant を読み上げたという friend の Mr. X。この手記の展開では Mr. X がキーワードにもなっている。foreign department とあるから特高(特別高等警察)外事課の警察官で、内偵対象・レーン夫妻の担当だったことは間違いない。

一般論でいうと、対象者を内偵・追尾する特高の手口には、対象者の生活へ不躰に入りこみ、あけすけに生活日程を問い質し、書棚等を検閲するという無礼さえあった。これを猫かぶりでまぶし、回を重ね日常化すると、内偵者と対象者の間に隣近所付き合いに似た奇妙な親近感さえもが生まれた。

レーン夫妻の場合は果たしてどうだったのか、この視点からの検証も欠かせない。Mr. X は、このあともしばしば登場する。

After the reading of the warrant, I was escorted to Police Headquarters where I was taken immediately to the Chief of Police who politely requested me to remove my wrist watch and wedding ring , both of which he put in an envelope, sealed, marked, and put away in a safe.

Then instructing me to follow him , he went down three flights of stairs to the jail where I was turned over to a guard , who , after asking me a few questions, placed

me in a cell with concrete walls and ceilings, barred back and front and every inch of me in clear sight of the guard.

Sitting down on the floor, I tried to think as to what the future held for me and my family. After what seemed ages, the big outer door opened and the sound of Harold's voice reached my ears, as he was placed in a nearby cell. It filled me with comfort and reassurance, and yet at the same time with a deep concern. Shortly after the jailing of Harold, our police friend, Mr. X, came with blankets and toilet articles which he had brought from our home. He whispered that Harold was in the cell directly above.

【参考】

令状読み上げのあと、私は警察本部に護送され、ただちに本部長のところに連れて行かれると、本部長は丁重な口調で私に腕時計と結婚指輪を外すようにと言った。彼はその二つを封筒に入れて封をし、印をつけ、金庫にしまった。

それから、自分のあとについてくるよう指示して、彼は三つ続きの階段を下りて留置場に着くと、私は看守に引き渡された。看守は私に二、三質問をしてから、私をコンクリート製の壁と天井のある独房に入れた。独房は前後にかんぬきがかけられ、私の姿は看守からくまなく見えるようになっている。

床に腰をおろして、私は私と私の家族にどんな将来が待ち構えているのかを考えてみた。かなりの時間が経ったと思われるころ、大きな外側の扉があき、近くの独房に入れられるハロルドの声が私の耳に届いた。

私はほっとして元気づけられたものの、同時に深い心配で頭がいっぱいだった。ハロルドの収監後まもなくして、わたしたちの友人の警官X氏がわが家から毛布と化粧道具を持ってきてくれた。彼は、ハロルドは真上の独房にいるとささやいた。

3 人が時間差で勾留

【検証】

Police Headquarters＝警察本部、本署。札幌圏（あるいは警察管区）で本部、本署といえば札幌警察署。また、Chief of Police＝本部長、署長。署長自ら出迎え、身柄確認して jail にご案内とは目を疑い、違和感多々と映るが、この考察は、後でまとめる。

次に、Harold's voice とあり、夫妻の検挙には時間差があった。前段にも、ハロルドは昼どきを挟んで銀行に行っていたとあり、帰宅を待ち受けての検挙だった。

このほか、手記に記載はないが、内務省記録では、家事手伝いの石上茂子も 12 月 8 日に連行されており、3 人それぞれの刻限に検挙されたと知れる。

最初に留置されたのは、jail。文脈から、警察署内に設置と分るので「留置場」と解される。cell は修道院の独居室を語源とする「独房」だが、後の段落で solitary cell という使い方もしているので、雑居房との混用の気配もあり、留意が必要になる。

もう一つ、後の段落で House of Detention が出てくる。意味するところは、その段で触れるが、ポーリンの用法では、この House of Detention と jail を合わせて Prison と解している。当時の法制上からは、被疑者を一時（短期）拘束する「留置場」、訴追された被告人らを拘置する「拘置所」あるいは「未決監」、受刑者を収容する「刑務所」とあり、ごく大雑把に括れば、jail, House of Detention, Prison で相応できるが、実際の運用では、現場の恣意ともいえる混用があるので、これも留意しておく必要がある。

The following morning, Mr. X told me that Father and the twin children were all right, but that it had been decided to move him to the hospital, and that by special arrangements, our twins were to be allowed to stay with their grandfather at the hospital. Father loved his little granddaughters so very much, and what a comfort they must have been to him through those last, sad, lonely, and confused days of his life.

Each gray morning would dawn with a hope in our hearts that something would happen to end the deadening monotony. The order to get up was a welcome sound, for almost all of us were awake long before the time.

When the guard came to unlock our cells, out we would pop. One from each cell would get a broom, one a duster, one a pail with water and a cloth, and another would carry a commode to empty it.

When alone in the cell, the sole occupant would do all these chores and was glad to have the opportunity to stir around. Several persons would line up at the long, low sink, where the brushing of teeth and the washing of faces and hands was almost a holy rite.

One morning while I was walking for exercise in the small space in the front of the cell, a guard motioned to me to a secluded corner where he opened his lunch basket, took out two oranges, gave them to me, and instructed me to take a broom and sweep the floor in front of Harold's cell and give him an orange. Needless to say, I obeyed with alacrity.

The next time this guard came on duty, he called me to him and said, "What a fool I was to tell you to sweep the floor in front of the cell when it's nothing but a grilled one. This time, go into his cell and help him clean it."

Each day, Mr. X would come with some information as to the welfare of the children and the failing health of Father.

【参考】

翌朝、X氏が話してくれたところによると、父（ヘンリー）と双子の子どもたちは皆無事だが、父は病院に移されることになり、特別の計らいにより二人の子どもは病院で祖父と一緒に過ごすことが許されたという。

父は小さな孫たちをことのほか可愛がっていたから、人生の最後の悲しく心細く、困惑の日々に、彼女たちが大きな慰めとなったに違いない。

うっとうしい朝が来るごとに、何かが起きて気の滅入る単調さを終わらせてくれないものかと期待したものだ。起床命令は歓迎すべき声だった。なにしろ私たちのほとんどは、それよりずっと前から目を覚ましていたのだから。

看守が独房の鍵を開けにくると、ひょいと私たちが現れる。各独房の一人が箒、一人がはたき、一人が水と雑巾の入ったバケツを受けとり、別の者がそれを空にするための脚付き整理だんすを運ぶのだ。

独房内に一人でいるときは、唯一の占有者がこうした毎日の決まりきった仕事すべてをやり、またその機会に動き回れることが嬉しかった。数人が長くて低い洗面台に整列して歯磨きや洗面、手洗いをするのだが、その様子はほぼ聖なる儀式に近かった。

ある朝、私が独房前の狭い場所で運動のために歩いていると、看守が私に人目につかない隅っこに来よう合図し、そこで自分の昼食かごをあけて、みかんを二つ取り出して私にくれ、さらに箒でハロルドの独房前の床を掃きながら一つを彼に与えるように指示した。言うまでもなく、私はすぐさま喜んで従った。

この看守はつぎの勤務時に私を呼び寄せて言った。「独房の前の床を掃除するようにあなたに言うなんて、俺はなんて馬鹿だったんだ、厳しい尋問とかわりないじゃないか。今度はご主人の独房に入って、掃除を手伝ってやってくれ」

毎日、X氏がやって来ては、子供たちが平穏な日々を送っていることや父の健康が衰えていっていることを伝えてくれた。

逆境にめげないポーリン

【検証】

勾留2日目の朝、夫妻の双子の末娘と老父の処遇が、これも Mr. X によって留置場に知らされる。hospital は、フランシスコ修道会の修道院に併設された「天使病院」で、この事実は既に知られていた。ただ、夫妻はプロテスタントで、修道院はカトリックだったから、なぜ天使病院だったのか、その経緯は不思議とされていた。

天使病院のくだりは、「II ベリー記事」で詳しく出てくるが、ここへ繋いだのも Mr. X の仲立ちだった。本会編『総資料総目録』では、検挙に伴う事後措置について「警察（行政）も北大も全く知らぬ顔で、窮状を見兼ねたカソリック系の修道院が双子を引き取り、老いた病人を併設の病院に移送し」と記述しているが、これは全くの思い込みであり、お詫びして訂正しなければならない。

手記は、表題が Prison Life とあるように、拘禁下の日常が主題となっており、紙数も多く割かれているが、一言にすれば、逆境にめげない感性の記録と言ってい。なにやら合宿所にも似た喧噪さえが伝わってくる。

当時、留置場内の環境作業を拘禁された者に分担させるのが慣行だったようで、その様子が具体的に記されている。半面、それによって拘禁ストレスの発散にもなった様子が被

拘禁者ならではの気配で記録されている。

看守たちに好感

ポーリンは、この作業を積極的にこなし、これが看守たちの間での好感度をも高めたようだ。花伝でも紹介の内田ヒデの手記『バビロン女囚の記』に記された「あの方はとても立派な人でした。ただスパイということで警戒しただけで、人間としてなら、私らは及びもつきません」という看守の言が、これと符合してくる。

それにしても、Mr. X といい、周りを引き込むポーリンの感性は驚異といえる。それは夫のハロルド共々、夫妻に学んだ北大 OB たちが、いまもってなお夫妻について語り続ける一事をもって十分に証明できるが、今回、発見の「手記」は、それが逆境にあって一層発揮されたと教えてくれる。

半面、これまで知られたエピソードの雰囲気によって、今回明かされた雰囲気とはかなり違う認識をしていたと、いまさら気づかされる。

たとえば、「(拘置所で洗濯係を命じられていた時、) 囚人の衣類の洗濯をしていると、その中に夫の一枚まじっているのを発見した。それで自分の赤い髪の毛を何本か抜いてその衣類に結びつけ、こうして二人は始めてお互いにまだ生きていて、同じ刑務所に収容されていることを知った」(『日本を映す小さな鏡』) という記述では、1 年 10 か月に及んだ拘禁生活の哀しみが切々伝わってくる。

これは、事件については寡黙とされた夫妻に代わり、四女バージニアの夫アール・マイナーが書いた記録で、この雰囲気が全てと受け止めていた。しかし、こういう情景もあったのだろうが、今回見つけた「手記」は、この雰囲気とは真逆で、看守らからの破格ともいえる好意を得て、毎日のように夫妻が顔を会わせていた様子が伝えられる。どちらをとるか、これも決めつけることなく、検証を重ねていく必要がある。

On December 19th, Harold and I were transferred to the House of Detention where the cells gave privacy and were very clean, with straw mats on the floor , two warm quilts on the bed , a screen in front of the washstand over the commode, a good-sized barred window, and heavy oak doors with open slats on one side through which the guard on duty glanced when he made his rounds. Here at the House of Detention, we had weekly baths and ample food.

The day after I entered the woman's part of the House of Detention, I was called to the warden's office. When I reached the office, he instructed the guard to poke up the fire and leave the room. He then gave me a cup of tea and talked for half an hour. This was the first of many visits and my admiration for the warden, and the gratitude to him for his friendly understanding and sympathy, grew with each meeting.

One day I asked if he were a Christian. He said, he was not, and asked why I had

asked him. I said, "Because you are what I would consider the highest type of a Christian gentleman." He said, "No, I am not a Christian, but I always try to be a true gentleman as I understand the term, He told me that he would keep us posted as to Father's condition and the welfare of the twins. He kept this promise in all the hard weeks and months to come.

The day, now spent in solitary confinement with an occasional visit from the guard and warden, were restful in a clean cell, but I missed seeing Harold twice a day, and I feared that the extreme cold of the unheated cells might bring on an attack of Harold's rheumatism. I told the warden of my fears and the next day he informed me that he had procured some warm comforters from our home, and that Harold was in good health.

【参考】

12月19日にハロルドと私は未決監に移されたが、その独房はプライバシーが守られていて、とても清潔だった。床に麦わらの敷物、ベッドに二枚の暖かい上掛け、洗面台のある脚付き整理箆笥の前にはついたて、かなり大きい格子窓、それに重いオーク材の扉があり、扉の片側は外が見える小さな細長い薄板が何枚かついていた。

そこから、勤務についた看守が巡回中にちらりと中に目を走らせた。未決監のここで、私たちは毎週の入浴をし、たらふく食べた。

私は未決監の女性棟に入った翌日、所長の執務室に呼ばれた。執務室に着くと、彼は看守に火をかきたてて退室するように指示した。彼はそれから私にお茶を出してくれ、半時間、話をした。

これを皮切りに幾たびか面会を重ねていったが、会うごとに所長に対する私の賞賛の念と、彼の親切な理解と思いやりへの感謝の気持ちが強まった。

ある日、私は、あなたはキリスト者ではないかと尋ねた。彼はそうではないと言い、なぜ私がそのようなことを聞いたのかと問うた。私は答えた。「あなたは、私の考えるキリスト教紳士の最高の典型だからです」。彼は言った。「いえ、私はキリスト者ではありませんが、私は常に、自分が理解するこの言葉どおりの真の紳士たらんと心がけています」。

彼は私に、父の健康状態と双子の娘たちの暮らし向きについては最新の情報を欠かさないようにすると言ってくれた。彼はこの約束を、その後の何週間、何カ月にもわたるつらい日々の中、ずっと守った。

独房監禁の日々を過ごしながらも、いまは時おり看守と所長の訪問を受けるようになって、清潔な独房で安らげるようになったが、一日に二度は無性にハロルドに会いたくなり、暖房のない独房の極寒がハロルドのリュウマチを冒すのではないかと心配だった。私が自分の心配を所長に話すと、翌日、彼はわが家から快適に過ごせる物をいくつか手に入れたことと、ハロルドの健康に問題ないことを告げた。

jail から House of Detention へ

【検証】

勾留 12 日目、夫妻は jail から House of Detention に移された。これも固有名詞を欠くが、大通拘置所、正式には札幌大通刑務支所とみて間違いない。移された理由は記されていないが、取調べの現場慣行から推して、長期勾留しての取調べ体制に入ったとみていい。制度の建前からは、jail は立件するか否かを決するまでの短期留置であり、勾留替えはその処分があったことになるが記録はない。

とまれ、住環境としては jail より格段によかったようだ。手記の筆致も支所長らに好意的で、これもいささか違和感をもよおす。そのうえ、勾留者と被勾留者の人間関係も悪くなかったようで、戦時敵対国の常識からは想像を超える情景が展開されている。

不思議の記事に裏づけ

実をいうと、1944 年 3 月 12 日付の『北海道新聞』に不思議な記事が載っている。「忘れられぬ恩情」との見出しで、レーン夫妻から札幌大通刑務支所の野手甚之助・支所長宛てに感謝の手紙が届いたという美談仕立てで、その全文が掲載されている。1944 年 3 月といえば、まだ対米英戦争の真ただ中、鬼畜米英史観ではあり得ない交歓ではある。

このため、偽書・虚報と疑う見方も否定できなかったが、今回、この手記によって感謝の実態が明らかとなり、手紙も本物だと証明されることになった。

手紙の末尾の日付には、1943 年 10 月 15 日とあるから、日米交換船の船上で書いたことになる。おそらくゴアから横浜に折り返した帝亜丸が持ち帰ったに違いない。手紙の原物の所在は不明で、いまや記事そのものが貴重な史料となっている。発見の端緒を開いたのは、元・札幌北光教会牧師の岸本和世さんで、他にもレーン夫妻の動静確認で数々の実績を重ねている。

On January 19, 1942, we were moved back to the jail, and I was placed in a cell with several women, while Harold was put in a solitary cell. Nine days after our return to the jail, we were told that Father was failing rapidly and that by special permission we were to be allowed to visit him at the hospital.

When I entered his room, Harold was already there, and Father was unconscious. We were there for six hours and during that time Father died. We made arrangements with our Congregational pastor for the funeral and upon returning to the jail, the guard who locked me in the cell took off his hat and said with deep feeling that he was indeed sorry to hear about Father's death.

The next day the funeral was held at the Congregational Church and the President of the University, the Dean, the Head of the English Department, the skillful eye doctor who had so successfully operated on Father for cataract, and many other

friends attended the service.

The days following the funeral witnessed the beginning of a period of tiresome and nerve-racking days. Hours and hours of questioning; being asked the same things over and over again.

Why such a person had visited us in 1934; what was the topic of our conversation; why did Harold visit the U. S. Embassy in Tokyo every time he went South; what did we teach our students; and when did we last go to the air field? Anybody who has been through such an experience can conceive the mental strain.

【参考】

1942 年 1 月 19 日、私たちは留置場にもどされ、私は数人の女性と共に一部屋に、ハロルドは独房に入れられた。

留置場への復帰から 9 日後に、父（ヘンリー）が急速に衰えており、特別許可によって病院で彼を見舞うのが認められることになったと言われた。私が父の病室に入ると、ハロルドがすでについて、父は無意識状態だった。私たちはそこに 6 時間いたが、その間に父は亡くなった。

私たちは組合派教会の牧師と葬儀の段取りをして留置場にもどると、私を房内に入れて鍵をかけた看守が帽子をとり、父上の死去をお聞きし心よりお悔やみ申し上げますと述べた。

翌日、葬儀が組合派教会で執り行われ、式には大学の学長、学部長、英文学科長、父の白内障手術をみごとに成功させた腕のいい眼科医、その他大勢の友人が参列した。

葬儀の数日後から、日々退屈かつ神経をすり減らされる期間が始まった。何時間も何時間もの尋問、繰り返し繰り返し同じことについて尋ねられる。

なぜ、しかじかの人物が 1934 年に私たちを訪ねてきたのか、会話の話題は何だったのか、なぜ、ハロルドは南下するたびに東京の米国大使館を訪れたのか、何を私たちが学生たちに教えたのか、そして私たちが例の空港に最後に行ったのはいつか？ 誰であれそのような経験をした者なら、その精神的な重圧を想像できよう。

不幸に不幸が襲う

【検証】

年が明けて、正月の半ば過ぎ、夫妻は再び警察の jail に戻された。理由はここでも記されていない。さきに、jail は短期、House of Detention は長期の拘禁施設と解したが、実際には取調べ現場の恣意が多分にあり、jail の方が警察にとっては手間暇が省ける。この段落の後半には nerve-racking days とあるから、jail へ移し替えられたことで、苛酷な取調べの始まりが予測される。

そのうえ、夫妻にとっては、家族が更に引き裂かれる生死の不幸に襲われる。病弱の老父ヘンリーが亡くなった。夫妻が勾留されて 1 か月余、事件が天寿を縮めたのは間違いな

い。そして 11 歳の双子の姉妹は、姉妹だけで生きていくことを強制される。

臨終に際して、夫妻は病院での看取りを許され、教会での葬儀もできた。葬儀には北大の総長はじめ歴々が参列してくれたと感謝を込め記している。開戦にあたっては、即、講義を差し止め、自宅謹慎を命じた大学当局だが、生死を分ける葬儀では儀礼を尽くすということなのだろう。

レーン夫妻はお客さん？

ここまで読み進んで、やはり根源からの違和感がぬぐえず、かえって濃くなる。たしかに夫妻には人間関係を豊かにする天性があり、どんな境涯にあっても自己を失わない楽天といってもいい健気さがある。

しかし、Mr. X、署長、支所長、看守たち、さらに総長、学部長、その対応ぶりはいささか度を超してはいないか。いかに人柄に惚れても、スパイ嫌疑で拘束した敵国人なのである。しかも戦時下にあって、各界各層での相互監視の空気は強まっている。

併せて、手記はおおむね時系列に沿って身の出来事を記しているが、取調べに関しては、この段落の後半にわずか数行あるだけで、あとはない。裁判、判決には言いたいことが山ほどあるに違いないのに、全く言及していない。

ずばり疑って、夫妻はお客さんだったのではないか。軍機保護法違反、スパイ嫌疑は文字通り口実であって、身柄隔離が目的であり、いずれ本国送還を視野においての「客人」扱いだったのではないか。

本国送還は、戦時における相互、互惠の関係にあり、双方向の利害に基づいている。敵国で拘束されている自国要人を取り返すまでの大切な人質であり、粗略に扱って機嫌を損ねては元も子もなくなってしまう。当時はまだ、官憲現場でもそれくらいの国際感覚は十分に持っていたし、上からの阿吽の通達があったことは十分考えられる。

何かの障害で一転、重罪へ

実際、一斉検挙で勾留された外国人 69 人のうち、40 人が本国に送還されている。(『外事警察概況』)。その法的処置では、夫妻と交流のあった小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)教師のダニエル・ブルック・マッキンノンは公訴取消、国防保安法で拘束された岩手県の宣教師ギルバート・シュレーヤは不起訴と、多くが乗船を前提の身柄解放の処置を受けている。レーン夫妻の場合は、この過程で何らかの障害が起き、一転、重罪へ振れたと考えれば、その後の展開とも符合してくる。

後段の取調べの状況については、ごく概略な記述に止まっているが、夫妻の「上告趣意書」と重なっており、その苛酷さと併せ、これまで知られた事実とも符合している。

Sleeping in a cell with changing cell mates and having a different quilt each day which had been slept on by all sorts and conditions of humans, soon made us itchy.

I feel humbly grateful and thankful for each one of those bothersome little cooties.

We would have gone out of our minds had it not been for them and the hunting they afforded.

In spite of the special food sent in by friends, I lost fifty-nine pounds. The guards remained friendly and each morning we had the opportunity of doing radio exercises led by a primary school teacher, who was in jail because he had been too liberal and democratic in his teaching. The day he was released, he came by my cell and whispered "I'm praying for peace and your release. "

Almost all sense of time was lost. Once we heard the shouting when a lantern parade went by the jail, celebrating the fall of Hongkong. Another night we heard our students singing to us.

Food began to take a more and more important place in our thoughts. We licked the dishes clean, even going so far as to run our fingers around the inside of the bowls and then licking them clean. Except for holidays and Sundays, I was kept mercifully busy, polishing, upholstering chairs, washing windows, preparing vegetables for the guards dining room, sewing, patching, filling quilts with cotton, working in the garden, and grinding buckwheat flour with a hand mill.

【参考】

囚人仲間が入れ替わる監房で眠り、あらゆる種類と体調の人間が寝てきた異なるベッドの上掛けを日ごと使っていると、まもなくして身体がむずかゆくなってきた。

私は一匹一匹のうるさい虱たちに、慎んで有難うございましたと感謝の意を表したい気持ちだ。彼らがおらず、追いかける機会を与えてくれなかったならば、私たちは気が狂っていたことだろう。

友人たちが特別食を差し入れてくれるにもかかわらず、私の体重は 59 ポンド減った。看守たちは相変わらず好意的で、私たちは毎朝、小学校教員の指導でラジオ体操をする機会があったが、その教員はリベラルで民主主義的すぎる教え方をしたために投獄されていた。彼は釈放された日に、私の房に立ち寄ってささやいた。「私は平和とあなたの釈放を祈っていますよ」

ほとんどすべての時間の感覚が失われた。あるときは、香港陥落を祝うちょうちん行列が獄舎のそばを通り過ぎる叫び声が聞こえた。別の夜には、私たちの学生たちが私たちに歌を歌ってくれているのを聞いた。

私たちの思考のなかで食べ物がますます重要な場所を取り始めた。皿をきれいに舐め、さらにボールの内側に指を這わせて指を舐めるまでになった。休日と日曜日以外は、ありがたいことに、私はずっと忙しくさせられていて、色々なものを磨き、椅子に詰め物をして布を張り、窓を洗い、看守たちの食堂の野菜を用意し、縫物をし、繕いをし、ベッドの掛け物に綿入れをし、庭で働き、そば粉を手臼でひいた。

負の感性へ傾く

【検証】

愛を基底に、健気に綴ってきた手記も、この段落からは負の情景に傾いていく。日ごとに身体能力が衰え、記憶、判断力が鈍り、何より飢餓の急迫におののきを隠さない。看守たちの自給自足の様子も織り込まれ、世相もしっかり捉えている。

In June of 1942 our twin daughters were selected to be repatriated to the United States. Before their departure, I was given the opportunity of talking with them for twenty-five minutes. I sat down with one on each side of me, and told them not to worry about the trip, and that upon arrival in San Francisco they would be met by Grandma and their four sisters.

After our too short talk, I gave them some letters Harold and I had written the night before for relatives and friends in America. As they left the room on the first lap of their homeward bound trip, the tears I had been holding back flowed unrestrained.

Four months later, Harold and I were taken to Yokohama to be repatriated to the States, but a few hours before we were scheduled to board the ship for America the plans were changed, and we were sent back to the House of Detention where just a few months previous we had been jailed.

After eleven months in the House of Detention, we were again taken to Yokohama in September of 1943, given our formal releases, placed aboard the Teia Maru, and returned home to our beloved country, the United States of America.

【参考】

1942年の6月に、私たちの双子の娘が選ばれて、合衆国に送還されることになった。出発前に私は、娘たちと25分間話をする機会を与えられた。私は一人ずつを脇において腰を下ろし、旅を心配することはないのよ、サンフランシスコに着いたらおばあちゃんとあなたたちの4人のお姉さんたちが迎えにきているからね、と言った。

あまりも短い会話のあと、私は二人に、アメリカの親戚と友人たち宛てに前夜ハロルドと私が書いた手紙を渡した。彼女たちが部屋を出て、本国への帰港の旅の第一行程に向かっていくのを見届けると、こらえていた涙がとめどもなく流れた。

4カ月後、ハロルドと私は合衆国への送還のために横浜に連れて行かれたが、アメリカ行きの船の乗船予定時間の2、3時間前に計画が変更され、私たちは以前に2、3カ月入れられていた未決監に送り返された。

未決監での11カ月後、1943年の9月に私たちは再び横浜に連れて行かれ、正式に釈放が認められると、帝亜丸に乗せられ、わが愛しの国、アメリカ合衆国に帰国した。

本国送還も時間差

【検証】

締めくくりは、本国送還。まず双子の末娘が先行し、夫妻は空振りの試練を挟み、1年10か月にして拘禁生活から脱出する。この経緯も、花伝での展開を裏づけるものとなっている。双子の航海については「Ⅱベリー記事」での紹介に譲る。

中で、交換船の帰り着く港を San Francisco と思い込んでいるのは、閑話休題とっていい。ポーリンにとってのアメリカは太平洋の対岸だった。これはほとんど日本人の感覚になっているとっていい。折から太平洋はまさに戦場であり、交換船といえども航行できるわけがない。だが、思いはそこへはいかず、ふっと太平洋を越えていく、ここがいかにもポーリンらしい。

書かれない事実にも史実

最後に、書かれていない事実にも史実がある。手記が、1941年12月8日早朝の出来事を過不足なく伝えているとすれば、書かれていない「事実」は史実ではない、との仮説が成り立つ。本件冤罪の解明で、いまなお懸案の一つである、あの情景だ。

この日、この時、冤罪被害者の一人・宮澤弘幸はレーン宅に居たのか否か。史実としての裏付けがないまま、宮澤弘幸が師である夫妻を訪ね、師への信頼の不動を誓ったとされる情景が、いまも根強く伝わっている。

この情景が広く知られたのは、上田誠吉著『ある北大生の受難』での描写による。夫妻宅を出た宮澤がまず近くの路上で尾行の特高に捕まり、その直後、レーン宅に踏み込んだ特高が夫妻を取り押さえ、と映像を見るように伝えている。まさに劇的な情景であり、当事者には、忘れるに忘れられない記憶となる。

まして特高、看守、支所長らから受けた温情に、一つ一つ心細やかに反応したポーリンである。この第一の状景が記憶から外れるなどあり得ない。

だが、手記に宮澤弘幸は影も出てこない。宮澤が訪ねたとされる時間帯は、既に夫妻が8時始業に向っていた時間帯とも重なっており、この時間の流れから推してもレーン宅訪問を史実にするには無理があり、可能性は限りなく低くなる。この情景は、「Ⅱベリー記事」ともつき合わせて、別途、稿をたて検証する。

もう一つ、書かれていない事実で、やり過ごせないのは、先にも指摘したように、裁判・判決への言及が全くないことだ。検挙の段では *suspicion of espionage* と明記しているのだから、容疑を否定しなければ容疑を認めたことになる。もちろん容疑を認めていないことは、一審判決に全面反論して上告し、自ら上告趣意書を書いていることでも明確になっている。

したがって、言及しなかったのは、それだけの理由があつてのことに違いない。一つには、手記が、母校の同窓生に向けて書いていること、内容において、愉快ではなかったけれども、酷い虐待は受けてなかったですよと伝えていること、つまり日本への好感度を慫慂

していることにあるのかもしれない。しかし、このへんは軽々に納得せず、留意しておくことが大事と思われる。

さらに、もう一つ、手記では、開戦の朝のラジオ放送にも全く触れていない。もし開戦を聴いていれば、触れないわけがない。というより、聴いていれば、この朝のレーン家族の動静そのものが随分と違ったものになる。したがって、聴いていなかったのは確かと思えるが、どうだったのだろう。朝の仕度で忙しいときにラジオなど聴かない、ながらもしない、あるいは、たまたま聴かなかった、聴けなかった、そもラジオがなかった等々、当時のラジオ一般の普及度、扱われようと併せ、少々気になるところだ。

【「手記」執筆の背景と検証】

原典 *News Letter* の発行日（1947 年 1 月 1 日）から推して、執筆は、1946 年の後半以降、検挙からは 5 年を経た、戦後まだ 1 年余という時期になる。また、4 年後の 1971 年には再招聘を受け札幌・北大に復帰しているから、送還後のアメリカ暮らしとしては、ちょうど折返し点にあたるあたりだったといっている。

当時、夫妻が住んだアメリカ東部のマサチューセッツ州オーバンデールは、開戦の前に、日本伝道から引退したポーリンの父母が居を定めたところで、ポーリンの母校のあるバーモント州とも隣り合っている。

ちなみに、ポーリンの母校はもう一つあって、Middlebury に進学する前の、19 歳からの 1 年間、オーバンデールのセминаリー Lasell で学んでいた。実は、この母校からも招かれてゲストスピーチしており、*News Letter* への寄稿よりも 1 年早い 1945 年刊の『LASELL LEAVES』冬号に要旨が掲載されている。

内容は *News Letter* と重なっており、あるいはゲストスピーチを下敷きに手記が書かれたのかもしれない。ただ、『LASELL LEAVES』には、編集者がまとめた概略が載っているだけで、原文は存在しない。史料としては惜しまれるが、記録された内容のうえでは *News Letter* 寄稿をもって代表されている。

手記は、ここまで解いたように、日本、あるいは日本人批判のないことで意表を衝かれる。これは逆に、鬼畜米英史観への強烈な注文づけなのかもしれない。夫妻、とくにポーリンには、出自や国籍を超えた札幌人とでもいえる生活実感があって、線を引いて物事を考える感性自体がないものと思える。

そんな札幌人・ポーリンにとって、オーバンデールは青春の一時期を過ごした、いわば第二のふるさと。その母校 *News Letter* への寄稿は、学びの同窓生に向けた明日へのメッセージであり、その文脈で読み返せば、筆者の人となりがよく見えてくる。

URL は

<https://archive.org/details/middleburyNewspapers1947-01-01/page/n13>

<https://archive.org/details/lasellleaves7072lase/page/n89>

II ベリー記事

レーン姉妹の証言

原典切抜きを基に、本件冤罪事件の真相解明につながる段落を抽出し、「レーン姉妹の証言」として紹介し、検証する。手元にあるのは、記事の当該部分だけを切抜いた複写で、記事の発行元、発行年月日とも把握できていない。しかし内容においては、多く当時の客観事実と整合しており、記事の真偽、存在を疑う懸念は見られない。

双子の末娘は、Dorothy と Katherine。記事は、当時 11 歳の二人が両親から切り裂かれ、言葉の通じない船上の旅を乗り越え、異邦に等しかったアメリカでアメリカ人になっていく人生の旅の一部始終を写しとったもの。苦難と成長を見守った共感のドラマ仕立てとなっているが、本稿では、その多くを別の機会に譲り、割愛した。

構成は「I ポーリン手記」と同じとし、日本語訳も同じ永井浩さんに依頼した。

(以下事務局 文責は本会会員・大住広人)

Memory of Own Jap Horrors Fade For Bay State Twins As Gripsholm Brings Parents Given Up As Dead



Katherine and Dorothy love afternoon tea. Here, in the home of their grandmother, Mrs. George H. Rowland, of Auburndale, they pose at the tea table.

By KATHERINE F. BERRY

NO ONE AWAITS THE ARRIVAL of the exchange ship Gripsholm with more excited joy than two little Auburndale, Mass., twin sisters who eagerly count the days until Dec. 2, when their parents, long given up for dead, are at last coming out of Japan. Dec. 7th marked their disappearance two years

in their room. They were not allowed outside the convent compound, nor were visitors permitted.

They suffered from cold, lack of proper food and clothing and nervous apprehension about their parents. No reasons were given, no explanation was made as to where they were taken, or when, if ever, they would return. Touched by the twins' grief and loneliness, the nuns assigned an American girl, connected with the institution, to sleep with them.

FORTUNATELY the children were somewhat accustomed to Japanese food, ways of living and companionship, or they would have succumbed to their hardships.

None of their many Japanese friends came near to console or help, except their kind policeman who one day brought the twins some American candy which he found in the house, and two German teachers from the University.

Incomprehensible, Americans would call such an attitude, to so desert old friends in distress, but in Japan today, the military arm of the law is long and strong. People are suspects if even seen with enemy aliens, no matter how harmless.

The Japanese also have a superstition about captivity. To find, it was always a judgment

ad. This was why, according to reports brought back by fellow passengers, that the parents were not sent over with their little daughters, because the six months between Pearl Harbor and the sailing date had not permitted the military time enough for the job.

And the twins' grandmother (who had lived for a time in their Japanese home), as the twins sat nearby to prompt her when needed: "We used to laugh at Harold for bothering to set down the daily happenings. No matter what was afoot, he must keep up his diary. That's all it was."

"To think that foolish diary should have become the very rope about his neck—doming evidence," to keep him in jail nearly two years!

"We got no direct word until Oct. 29, when I received a cable from them from Bombay, India, saying, 'Well, Love.'"

PREVIOUS to the cable, she had received a phone call from John E. Werby, ex-governor of Vermont and a warm friend, who has given utilizing efforts through diplomatic sources in Washington to obtain the Lanes' release; he had news that they had been released. His labors, supplemented by State Depart-

Memory of Own Jap Horrors Fade For Bay State Twins As Gripsholm Brings Parents Given Up As Dead

【参考】

日本でのおぞましい記憶が薄らぐ

湾岸州の双子姉妹

死んだと諦めていた両親がグリプスホルム号で帰国

By KATHERINE F. BERRY

筆者；キャサリン F・ベリー（記者）

NO ONE AWAITS THE ARRIVAL of the exchange ship Gripsholm with more excited joy than two little Auburndale, Mass., twin sisters who eagerly count the days until Dec.2.when their parents, long given up for dead, are at last coming out of Japan.Dec.7th marked their disappearance two years

【参考】

日米交換船グリプスホルム号の到着を、マサチューセッツ州オーバンデールの子供な双子の姉妹（以下＝レーン姉妹）ほど、心躍らせながら待ちわびている者はいない。姉妹は、とくに亡くなったものと諦めていた両親（レーン夫妻）が、ついに日本を出国し、(到着する) 12 月 2 日まであと何日かと指折り数えている。両親が姿を消したのは、二年前の 12 月 7 日だった。

【検証】

『第二次交換船 帝亜丸の報告』（青木ヒサ著・前田書房刊）によれば、グリプスホルム号は、1943 年 9 月 1 日にアメリカ・ニュージャージー港を出港、同年 10 月 16 日にインド・ゴア港に着き、横浜港から先着していた帝亜丸と乗船者を交換し、ニューヨーク港へと向かった。レーン夫妻らは、この帝亜丸からグリプスホルム号に乗り換えた。

日米交換船は二度出航しており、これは第二次船。第一次船は 1942 年 6 月、日本は浅間丸、アメリカは同じグリプスホルム号を用いて実施され、レーン姉妹は横浜港で 6 月 17 日に浅間丸に乗込み、アフリカ東海岸のマルケスでグリプスホルム号に乗り換えている。

—略—（6 段落分）

THEIR STORY dates back to the Winter of 1941 and the afternoon of Dec.7, when the girls came home from the Japanese public school they attended.

They have reason to remember Dec.7. First, it was their mothers birthday and they were planning a happy surprise. Then came the excitement of that morning at a school, when the teacher announced war had been declared with the United States and bombs dropped on Pearl Harbor!

【参考】

話は 1941 年の冬、レーン姉妹が、通学先の日本の公立学校から帰宅した 12 月 7 日の午後にさかのぼる。

彼女たちが 12 月 7 日を忘れないでいるのは、わけがある。最初、この日は姉妹の母親の誕生日なので、二人は母をびっくりさせるようなお祝い事を計画していた。次いで起きたのは、その朝の学校での興奮状態だった。先生が、アメリカとの戦争が布告され、真珠湾に爆弾が投下された！と告げた。

始点は 12 月 8 日午後

【検証】

真珠湾に爆弾投下は日本時間で 1941 年 12 月 8 日、米国時間では 12 月 7 日になる。注目は、the afternoon of Dec.7 と時間帯を明示していること。姉妹にとって忘れられない強い記憶となる出来事が「午後」に起きたことを強調している。前後の文脈から、姉妹は戦争勃発など知らずに登校したのは明らかだ。

War! What did it mean?

Their teacher accompanied Dorothy and Katharine home to inform their parents of this terrible news, only to find that the Lanes had gone! Spirited away , no one knew where!

【参考】

戦争！ それは、どんなことを意味したのか？

姉妹の先生は、ドロシーとキャサリンにつきそって家に行き、姉妹の両親にこの恐ろしいニュースを伝えようとしたところ、レーン夫妻は出払っていたのだ！ 夫妻は何者かにこっそり連れ出されたが、行き先を知る者はいなかった！

【検証】

7 日（日本時間 8 日）の午後、姉妹が自宅に帰着いた時、既に両親は居なかった。つまりレーン夫妻が検挙・連行された後だった。姉妹の母親・ポーリンの手記と重ねて、この日の時系列をたどると、

午前 7 時半前後；朝食後、家族それぞれに登校。老父ヘンリーとお手伝い・石上茂子は出かけることなく留守居

午前 8 時前後 ; ポーリン、学長に呼ばれ、日米開戦を告げられ、自宅待機を命じられる。

午前 9 時前 ; ハロルド、次いでポーリン帰宅。ハロルドも同様、命じられていた。
ハロルド、銀行へ行く。

正午前後 ; ヘンリー、ポーリン、昼食を摂っていると玄関でベル。ポーリン拘束され連行される。家中、家宅搜索で荒らされる。

; ハロルド帰宅し、そのまま拘束され、連行される。

午後 ; ドロシー、キャサリン、帰宅。

; 石上茂子、拘束され、連行される。

; ヘンリー、ドロシー、キャサリン、警官 X に伴われ、天使病院へ。

※前項「I ポーリン手記」で指摘の、ベリー記者の別記事は「Their Ship Came In」との見出しで載っている。内容は、本稿「Memory of Own Jap Horrors Fade」を圧縮した同趣旨で、掲載日も前後していたと推定される。以下、便宜上、本稿を「ベリー I 記事」あるいは「ベリー I」とし、別記事を「ベリー II 記事」あるいは「ベリー II」とする。

そこで、「ベリー II」では、下校の時間帯を「朝の興奮状態」の後、An hour or two later they were brought home by the teacher と記述している。朝の興奮状態を引きずったまま、双子の姉妹に授業を受けさせるのは酷であり、始業後の早い時間帯に帰宅させたと推定される「ベリー II」の方が蓋然性高いように思われる。したがって、下校時間帯については更に検証が求められる。

All was confusion at home, police searching the house, the servants frightened, their old and frail grandfather , Mr. Henry Lane. huddled. bewildered, in a corner. The twins were told they could not return to school, non could they in sniff of tearful.

【参考】

家じゅうがごった返し、警察が家宅搜索し、お手伝いさんたちはおびえ、(姉妹の)老齢で身体の弱い祖父ヘンリー・レーンが片隅でちこまり、当惑していた。姉妹は学校にもどれないし、涙ぐんでもいけないと言われた。

【検証】

police は特高（特別高等警察）の外事刑事。お手伝いさんは servants と複数になっているが、実際は石上茂子が一人いただけ。この記述では、レーン夫妻が検挙・連行された後も石上が屋内に居たことになる。

Two policemen were detained to watch the house that night, one of them was kind, a man they knew. Trying to comfort them, he bade the girls-matter a few things

together, clothing, toys, books, and come with him. No English books were allowed, but that didn't matter for the twins couldn't speak or read English anyway!

【参考】

その夜、二人の警察官が（レーン）家を監視するために留め置かれたが、その中の一人は、（姉妹の）家族が知っている親切な人だった。彼（親切な警察官）は姉妹をなぐさめようとして、衣類やおもちゃ、本などを取りまとめてもってきてくれた。英語の本はいっさい許されなかったが、姉妹にとってそれは苦にはならなかった。そもそも二人は英語を話すことも読むこともできなかったのだから。

親切な警察官は Mr.X

【検証】

「親切な警察官」は、ポーリン「手記」に出てくる Mr.X と同じ人物。子供の目から見ても kind だったとわかる。

レーン姉妹が、英語の読み書きが出来なかったのは、レーン家が日常生活を日本語で通していたことによる。通学した学校も札幌師範学校の附属で、「どーちゃん」（ドロシー）「けーちゃん」（キャサリン）と呼ばれ、日本の子と変わりなく溶け込んでいた。

HE TOOK THEM to the hospital annex of a Japanese Catholic convent. At first they slept in the room with their grandfather. After he became ill, they were moved to the school wing of the institution, and put in a small bare, unheated room which looked out through sliding paper doors onto a courtyard.

【参考】

彼（親切な警官）はレーン姉妹を日本のカトリック女子修道院の病院別館につれていった。最初はその部屋で祖父（ヘンリー）といっしょに寝た。祖父が病気になると、姉妹は修道院の中の学校棟に移され、がらんとして暖房のない小部屋に入れられた。障子を開けると、部屋から中庭が望めた。

【検証】

先の「ポーリン手記」で明かしたように、この Catholic convent が「フランシスコ修道会」の修道院で、hospital annex が同修道会付属の「天使病院」。Mr.X がどのような経緯で修道会と取り持ったのかは知れないが、修道会は人道に徹し、宗派を問わなかったのだろう。この後も、修道会は拘束中の夫妻の委託を受け、資産（預金）を保管し、夫妻への差し入れを行っている。

None of their many Japanese friends came near to console or help, except their kind policeman who one day brought the twins some American candy which he found in the house. and two German teachers from the University.

【参考】

レーン姉妹にはたくさんの日本人の友だちがいたが、誰一人として姉妹を慰めたり助けたりするために近づこうとはしなかった。例外は、あの親切な警察官と北海道大学の二人のドイツ人教官だけで、警察官はある日、(レーン) 家で見つけたアメリカのキャンデーをいくつか持ってきてくれた。

【検証】

このドイツ人は、外国人官舎で隣り合わせたヘルマン・ヘッカーと、ビリー・クレンプだった可能性が高い。

—略— (5段落分)

Mr. Lane had kept a diary in English during his 20 years life in japan. A simple account of daily happenings –but it was enough for the police, who must advise the military.

The military must read this volume and take careful time to have it translated. This was why according to reports brought back by fellow passengers, that the parents were not sent over with their little daughters, because the six months between Pearl Harbor and the sailing date had not permitted the military time enough for the job!

【参考】

レーン姉妹の父・ハロルド・レーンは20年にわたる日本の生活のあいだに、英語で日記を書いていた。日々の出来事を簡単に記したものだが、それだけで警察にとってはじゅうぶんだった。彼らはそれを軍に通知しなければならない。

軍は、この日記を読み、入念に時間をかけて翻訳しなければならない。交換船の仲間の乗客たちからの報告によれば、両親(レーン夫妻)は小さな娘たちと共に送還されなかったということだったが、その理由はこういうことにあったのだ。

真珠湾攻撃から出航日までの6カ月間では、軍は自分たちの仕事をやり終えられなかったのである。

ハロルドの日記

【検証】

日記の存在は、これまで知られていなかった。「交換船の仲間の乗客」が誰なのかも不明。

あるいは後出の駐日米大使らを指すのかもしれないが、もし外交ルートに日記の存在が伝わっていたとすると興味深い。

ただ、軍との関係云々はアメリカ側の思い込みであって、実際には疑問。もちろん、特高にとっては最大の押収物であり、容疑を固める上での日時の特定など、枠組みに使われたことは間違いない。しかし、大審院判決から推しても、日記がスパイ罪の直接の証拠にされた形跡はない。証拠にはならなかった、ということになる。

日記が、ハロルドに返却された形跡もない。当該捜査資料共々破棄・焼却されたと思われるが、なんとも取り返しつかない。

—略—（２段落分）

We got no direct word until Oct.29, when I received a cable from them from Bombay, India, saying, Well. Love!

【参考】10月29日まで、レーン姉妹の両親からの直接の言葉は何ひとつ届いていなかったが、この日、姉妹の祖母ローランド夫人にインドのボンベイから一通の電報が届き、「元気だ、愛している！」と書かれていた。

【検証】

この段は、ポーリンの母親・ローランド夫人による語りの一部なので、主語が We、I、となっているが、訳文では相互の関係が分かるように補って表記してある。

電報は、日付からみても、おそらく交換船の寄港先から打ったと思われるが、インドでの寄港地はゴアなので、ここは検証を要する。レーン夫妻の乗った帝亜丸は10月15日にゴアに着き、遅れていたグリッpsホルム号の着港を待っていた。電報を打ったとすれば、この待機中に港の電報局からだったと思われる。

PREVIOUS to the cable, she had received a phone call from John E. Weeks, ex-governor of Vermont and a warm friend, who has given untiring efforts through diplomatic sources in Washington to obtain the Lanes, release, he had news that they had been released. His labors, supplemented by State Depart including Ambassador Grew and Cordell Hull. had not been in vain.

【参考】この電報に先立って、彼女（ローランド夫人）はバーモント州の前知事で、ワシントンの外交筋を通じてレーン夫妻の身柄確保と釈放のためにたゆまぬ努力をつづけていた心暖かい友人であるジョン・E・ウェックスからの電話を受けていた。

レーン夫妻が釈放されたという知らせがあったというものだった。彼（ウェックス）の骨折りは、グルー駐日大使とコーデル・ハル國務長官をふくむ國務省の助力を得て、無駄ではなかった。

外交駆け引きの具に

【検証】

この段でも she はローランド夫人になる。レーン夫妻の送還をめぐっては、日米双方の交換船を港外に停泊させての緊迫したやり取りがあり、その詳細は『日米交換船』（新潮社刊）に記録されているが、その経緯が、現在進行形の形で在米の親族にも伝わっていたということは留意される。

Showing me Hulls personal signature on a letter, she added. Knowing the state of Japanese prisons, especially a Hokkaido prison, I long since gave up any hope that they could have survived . It is like the dead come back to life!

【参考】

ハルの署名が記された手紙を私（ベリー記者）に見せながら、彼女（ローランド夫人）は言葉を継いだ。日本の刑務所、とりわけ北海道の刑務所の状況を知って、私（ローランド夫人）はとっくの昔にレーン夫妻が生き延びているのではないかという希望は捨てていた。死者が生き返ったようなものです！

—略—（3行分）

One day the twins saw a coffin being carried out into the dark street. and were told it was their grandfather being taken away! C***** piteously over his loss, their worry mounted as to the possible fate of their parents and their own future.

【参考】

ある日、レーン姉妹は棺が暗い通りに運び出されるのを見た、そしてそれは祖父が連れ去られようとしているのだ！と言われた。祖父がいなくなったことを嘆き悲しんでいると、両親の運命と自分たち自身の将来がどうなるのかの心配が募ってきた。

※*****は印字が潰れていて判読困難（以下、同）

—略—（4段落分）

SUMMER CAME, and on June 2, the kind policeman arrived, to tell them that they were to be shipped to the United States. but alone! The twins said they preferred to die near their parents. The United States was but a name to them, a distant place where lived relatives whom they had never seen, even. their sisters, sent over earlier. were almost strangers, having left Japan when the twins were small.

【参考】

夏がおとずれ、そして6月2日、あの親切な警察官がやってきて、レーン姉妹は船で合衆国に送られることになったと告げられた。でも姉妹が二人っきりで！ 姉妹は両親の近くで死んだ方がましだと言った。姉妹にとって合衆国とは名称にすぎず、自分たちが会ったこともない親類が住んでいる遠い場所でしかなかった。以前に送還された姉たちでさえ、姉妹が小さなころに日本を後にしていて、他人同然だった。

幼い二人で「異邦」への航海

【検証】

レーン姉妹には4人の姉がいて、いずれも開戦前に、修学のためアメリカに渡っていた。したがって開戦後の送還とは全く違う。また、ポーリンの大審院判決に引用された上告趣意書によると、レーン姉妹の送還が決まる前に、ポーリンへも送還の打診があった。夫妻の分断を図るもので、ハロルドだけを公判に残し、母子送還という誘い込みだった。ポーリンは拒否し、しかし娘たちの戦時下の安全を願って二人だけの送還に同意した。

The policeman took them to the police station where, to their unbelieving eyes, and unspeakable joy they found their beloved Ka-chan, little mother!

Their joy was short-lived, however, as they were only allowed five minutes with her and , of course, under police supervision.

【参考】

警察官につれられて(レーン姉妹が)警察署に行くと、そこには最愛の「かあちゃん」がいるではないか！ 二人は目を疑い、喜びを声に出せないほどだった。

だが喜びは、長くはつづかなかった。母親との面会は5分しか許されず、それももちろん、警察の監視下で、だった。

【検証】

レーン姉妹は、母親を「かあちゃん」と呼んでいた。ポーリン「手記」では、25分間と記しているので、あふれる情感による時間感覚の差が顕れている。母の方には予告があったので、アメリカでの行先を記した英文に日本語の仮名を添えたメモを用意し、渡している。ポーリンの「上告趣意書」によると、レーン姉妹が札幌を発ったのは6月4日と記している。

—略— (3段落分)

ON THE TRAIN to Yokohama the twins were accompanied by a strange policeman and the young Eurasian girl. At Yokohama, this policeman abandoned them at a hotel, giving them no ticket or money. He simply told them to get on the boat.

【参考】

横浜に向かう列車には、見知らぬ警察官と若い欧亜混血の女性がレーン姉妹に同行した。横浜で、この警察官は姉妹をホテルに預けると、乗船券も金銭も渡さず、立ち去った。警察官は、船に乗れとだけ言った。

—略—（1 段落分）

People asked them questions, but the children could not understand. Finally the young daughter of Mrs. C. W. Schroer, of Japan, heard the sobbing of little girls as she passed down the hall, and reported it to her mother who at once took them under her motherly wing.

【参考】

人びとがレーン姉妹に質問してきたが、姉妹は理解できなかった。やっと C・W・シュレーヤ夫人の若い娘がホールを通りすぎりに小さな女の子のすすり泣きを聞き、それを母に告げると、母はすぐさま姉妹の面倒を優しく見てやった。

シュレーヤに救われて

【検証】

コーネリア・W・シュレーヤは、岩手県盛岡市の宣教師ギルバート・シュレーヤの妻で、ギルバートは開戦翌日の朝、国防保安法の違反容疑で拘束された。「若い娘」は、その長女・エイブリンで、一家三人で送還となり、レーン姉妹と乗り合わせ、下船まで庇護した。

—略—（2 段落分）

The second event was June 17, the sailing date and their birthday! So the night before, Mrs. Schroer gave them a little party and a big birthday cake. And never did anything taste so good. The twins assured me.

【参考】二つ目のできごとは 6 月 17 日、出航の日とレーン姉妹の誕生日だった！そこでその前夜、シュレーヤ夫人は姉妹のためにささやかなパーティーを開き、大きなバースデイクーキをふるまった。これまでに味わったことのない美味しさだった。レーン姉妹の言葉に嘘はないだろう、と私（ベリー記者）は思った。

【検証】

June 17, the sailing date とあるのは、実際には、姉妹らが乗船した日。姉妹は 6 月の 3 日から 6 日の間に横浜に着いたと思われるが、実は、この間に乗船者の確認をめぐって、アメリカ側から強談判が入っていた。

Boarding the Asama-Maru which was to meet the Gripsholm, passengers were dismayed at another weeks wait outside the breakwater. The twins were assured that their parents would appear, but again they suffered ll***** , which was to a***** into weeks and months, ill they were to finally abandon all hope.

【参考】

グリプスホルム号と（アフリカ東海岸で）落ち合うことになっている浅間丸に乗船したものの、乗客はさらに数週間の防波堤外での待機にうんざりさせられた。

レーン姉妹は、きっと両親が姿を見せるはずだと聞かされていたが、またも期待外れに終わった。失意は何週間、何カ月と尾を引き、ついに姉妹はあらゆる希望を捨てることになる。

【検証】

この待機は、アメリカ側からの強談判による。アメリカ側は日米合意でレーン夫妻を含む特定の3人が乗船しているものと理解していたが、出航直前になって乗船していないと知り、対抗処置として日本側の要人3人を下船させると通告してきた。切羽詰まった交渉の結果、第二次交換船に乗せるとの念書を通すことで合意に至り、決着している。



記事は、この他、2か月に及んだ船旅での幼い二人の悲しみと頑張りの様子、さらには両親と再会するまでの1年半に及ぶ、二人にとっては「異郷」だった地での、アメリカの子供になっていく過程を慈しみの筆致で描いているが、それはまたの機会として、この稿では割愛する。

—以下略—（21段落分）

【ベリー記事の背景と検証】

切抜き原典は、双子の姉妹自身か、その周辺から、ポーリンの北海道学芸大学（現・北海道教育大学）当時の教え子の一人・松竹谷智さん（故人）に届いた。その複写が松竹谷さんや、知人らを介して何人かに伝わり、本会でも、本件冤罪解明の『総資料総目録』編纂の折に全文入手している。

記事の史料価値見直しは、吉田栄一さんのシュレーヤ研究に遡る。吉田さんは、岩手県盛岡市在住で、戦前、同地域での布教にあたっていたアメリカ人宣教師ギルバート・シュレーヤの動静を追っていた。シュレーヤは日米開戦の翌日、国防保安法によって拘束され、家族共々日米交換船での送還となり、その船上で双子の姉妹を知ることになる。この船上での一部始終を含め報じたのがベリーの記事だった。

執筆は、冒頭の count the days until Dec.2 から推して、1943 年の 11 月と思われる。レーン夫妻を乗せた交換船 Gripsholm が姉妹の待つ東部海岸に帰港する直前、札幌で親子が引き裂かれてから 1 年半を経ての再会となる。まだ、戦争のさ中であり、その中で、「事件」を伝える最初の記事ともなった。

ベリー記者の父親（ジョン・ベリー）は、宣教師で眼科医。1872 年に来日し、兵庫県、岡山県、京都府とめぐり、京都では同志社病院の院長も務めた。この間、少女期のベリー記者は、同志社女学校で学び、その後、高校、大学は故郷・マサチューセッツに転じ、卒業後の 1919 年、同志社女学校専門部の講師に就いている。

同時期、ポーリンも同女学校の教職に就いており（1917 年）、二人共短期だったので入れ違いではあるが、互いに存在は知っていたに違いない。ポーリンの父も宣教師として、ベリーの父を追う形で任地をめぐっているのも、家族ぐるみでもあった。幼い姉妹も、そんな雰囲気の中で辛い思い出を話したと思われる。

記事は、せっかく札幌に伝わりながら、ながく埋もれていた。見出しのイメージからも、幼い双子の辛く長い船旅が記録されているとの思い込みがあつてのことだが、もとより、これは釈明にも理由にもならない。吉田さんの「手記」発見を契機に史料価値が見直されたことになった。

戦争中の紙面であるにも関わらず、「鬼畜日本」式の筆致はなく、客観性、平衡感覚のくみ取れる紙面構成となっており、共感を覚える。これはポーリンの「手記」とも通底し、戦争がいかに弱い者、幼い者を集中して苦しめるか、それが母親目線で告発されている。

国家権力犯罪を糾す 宮澤・レーン・スパイ冤罪事件

総資料総目録 補遺 2020 年

2020 年 6 月 1 日発行

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会

<http://miyazawa-lane.com/>

事務局＝福島清、根岸正和、水久保文明

101-0061 東京都千代田区神田三崎町 2-19-8 杉山ビル 2F

千代田区労働組合協議会気付

TEL:03-3264-2905 FAX:03-6272-5263

e-mail:chyda-kr@f8.dion.ne.jp

★本書の内容の全部または一部の複写をする場合は事務局までご一報ください。